第 136 回 研究協議会（秋季）

香 川 大 会

―研 究 協 議 資 料―

（令和８年 10 月 15・16 日）

全国高等学校長協会家庭部会

〒102-0071　東京都千代田区富士見１丁目５―６
電　話　０３―３２６１―０６１７
ＦＡＸ　０３―３２８８―１６７０
E-mail : all-kocho@katei-ed.or.jp

目　　次

＜研究協議　Ａ＞　家庭学科設置校又は家庭系列のある総合学科の学校

１　「生きる力を育む」生徒が主語となる「地学協働探究学習」の構築と科学的評価
　　～地域を教室とした挑戦と学校存続をかけた魅力化戦略～
北海道当別高等学校長　　保 格 秀 規 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 2

２　家庭科専門学科の学びを活かした地域協働の取組
　　― 継続的な取組とその成果、そして新たなる未来への継承 ―
愛媛県立小松高等学校長　　越 智 真 次 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10

３　生徒の主体性を伸ばす生活デザイン科の特色ある取組
　　～農業に関する学科との連携を通して～
福岡県立福岡農業高等学校長　　平 田 陽 一 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17

＜研究協議　Ｂ＞　Ａを除く学校

１　普通科高校における家庭科教育について
　　～生活者を育て、ウェルビーイングをひらく～
栃木県立佐野東高等学校長　　山 﨑 貴 史 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 23

２　地域と共に歩む　～琴平高校の今とこれからの課題～
香川県立琴平高等学校長　　村 上 盛 彦 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 31

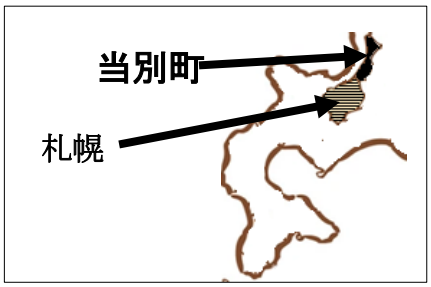
３　家庭科の授業における生成ＡＩの活用
大分県立情報科学高等学校長　　橋 本 武 晴 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 38

「生きる力を育む」生徒が主語となる「地学協働探究学習」の構築と科学的評価
～地域を教室とした挑戦と学校存続をかけた魅力化戦略～

北海道当別高等学校長　　保　格　秀　規

Ⅰ　はじめに：当別高校の挑戦と教育改革の理念

1　本校の概要



北海道当別高等学校は、普通科、園芸デザイン科、家政科を設置する全日制高校です。札幌市に隣接する当別町に位置し、生徒の約８割が札幌市及び周辺市町から JR を利用して通学しています。札幌圏では少子化が進行しており、令和９年度から令和 14 年度までに中学校卒業者数が約 2,000 人減少すると見込まれています。さらに私立高校授業料無償化の影響もあり、生徒確保と学校存続が本校の最重要課題となっています。



こうした状況を受け、本校では令和５年度から北海道教育委員会の庁内公募校長制度を活用し、「生徒が主語となり、地域とともにある学校づくり」を理念とした教育改革を進めてきました。

その基盤となったのが、地学協働探究学習です。本校では、生徒が地域課題の解決に主体的に参画することを通して、自己肯定感や自己有用感を高めるとともに、地域への愛着や誇りを育むことを目指しています。

2　生徒の思いを社会とつなぐ『粘議場（ネバギバ）』の開発



本校普通科では、外部連携は社会人講話のみで、生徒は受け身の学習者となっていました。そこで令和５年度に普通科プロジェクトチームを編成し、企業との協働による課題解決型探究学習を開始しました。地域企業が抱える課題に対し、生徒が解決策を提案し実践する学びへと転換したのです。

生徒自身の興味・関心を起点とした探究活動では、多くの生徒がテーマ設定の段階で立ち止まり、自らの発想を具体的な行動へ結び付けることに困難を抱えていました。そこで誕生したのが『粘議場（ネバギバ）』です。

『粘議場』は、生徒が地域の大人に向けて企画を提案し、「人・物・金・助言」の支援を求める熟議の場であり、コミュニティ・スクールの仕組みの一部です。地域住民、企業、行政関係者は、企画の実現可能性や地域的価値について生徒と議論し、賛同した場合には具体的な支援を行います。

本取組の特徴は、「発表の出来映えで評価しない」「挑戦のプロセスを承認する」という哲学です。生徒は失敗を恐れず何度でも挑戦することができ、地域の大人たちは伴走者として成長を支えます。

近年では、地域住民からも地域創生に関する提案を『粘議場』で発表したいという申し出が寄せられるようになりました。多様な立場の地域住民が地域の将来について議論する姿に触れることは、高校生にとって地域社会の一員であることを自覚し、地域への参画意識を高める貴重な機会となっています。

3　生徒の変容と成長：実感を伴った理解



本校には、義務教育段階で十分な成功体験を積めず、自己肯定感が低く、人前で話すことに苦手意識を持つ生徒が少なくありません。一方で、大人達との対話などを経た様々な体験を通して、成長した姿を見せる生徒も多くいます。

次に紹介するのは、「当別町雪まつりでスカイランタンを実現したい」と提案した普通科生徒Ａの事例です。



活動当初は、小さな声で下を向きながら発表していました。しかし、『粘議場』での発表や地域の大人との対話、実験や検証を重ねる中で、自らの企画に自信を持つようになりました。その熱意は地域の大人たちを動かし、当別町商工会青年部から急遽資金支援の申し出を受けました。翌年度実施予定だった企画は前倒しされ、年度内の雪まつりで規模を縮小して実施しました。

当日は 1,000 人以上の観客の前で堂々とマイクを握り、８基のスカイランタンを夜空へ打ち上げることに成功しました。活動後、生徒Ａは「人前で発表することに緊張しなくなった」「人の意見を聞くことで、自分にはない考え方を知り、視野が広がった」と振り返っています。

このような変容は、生徒と地域との接点を増やしただけで生まれたものではありません。生徒の挑戦を承認し、多様な大人が伴走者として支える環境が整ったことで、生徒は新たな価値観を獲得し、自ら次の行動を選択できるようになったのです。

４　評価の科学性： ALACT モデルによる省察の可視化と EViC の開発

本校では、生徒の成長を客観的に評価するため、コルトハーヘン（オランダの教師教育学者）の ALACT（アラクト）モデルを基盤としたリフレクション評価を導入しています。特に、

・行為の振り返り（次のレポートの太字ゴシック）
・本質的な気付き（次のレポートの斜字ゴシック）
・行動の選択肢の拡大（次のレポートの太字明朝下線）

の３要素に着目し、生徒の振り返りの記述を分析しています。

【ALACT モデルで分析した生徒の振り返りレポートと分析例】

今回の「総合的な探究の時間」で私は、決めていた質問を時間が足りなくて言えなかったことがありました。一方で、**決められた質問以外に、その場に見合った質問をすることができました。**それに対して、私は満足していました。ただ、**私ともう１人の２人だけが手を挙げていたので、その時はほかの人からも「質問してくれー」と思っていました。**でも、***今しっかり考えると、決めていた質問をあらかじめ共有していなかった自分に非があると思いました。***また、**私は今回、うなずきながら人の話をしっかり聞きましたが、正直、どんな話だったのか覚えていない**ところがあります。***聞いたことと学んだことでは全く違うと思う***ので、このままでは駄目だなと思いました。次に企業の方々とかかわる時には、**話を聞くだけではなく「なぜこうなるのか」「なぜそうしないといけないのか」をしっかり考えていこう**と思いました。

実践の結果、「振り返り」「気づき」「次の行動」の全てが記述されている生徒ほど、主体的な行動や挑戦を継続する傾向が確認されました。

「振り返り」「次の行動」の記述のみの生徒は多く、省察が甘く同じ失敗の原因を掘り下げられなかったり、失敗を繰り返したりする姿が見られました。

「振り返り」の記述のみの生徒は、行動の記憶が曖昧で想起につながる問いかけが必要でした。

生徒の思考と行動の評価の分析により、教員は根拠を持ってフィードバックを行い、生徒も変容を自覚できて、生徒と教員のリフレクション能力の向上につながっています。

さらに、学校教育目標から「尊敬心」「課題解決力」「自己肯定感」「協調性」「積極性」「探究力」の６つの資質・能力を「当高力」（当別高校生として身に付けさせたい資質・能力）として整理し、育成を目指しています。探究活動での評価基準を「当高力」で判定させるために、生徒の振り返りレポートの記述から１つの動詞で完結する 43 項目の行動指標を抽出し、６つの「当高力」に分類した独自評価ツール「EViC（Evidence Visualization of Competency）」を開発しました。

EViC の活用により、生徒の成長を具体的な行動として可視化できるようになりました。また、生徒自身が自らの成長を確認できるため、次の挑戦への動機付けにもつながっています。

EViCテーブル
(Empirical Viewpoints for Competency)
～自分を変えずに、自分が【孵る】ように生きる43個のコツ～

尊敬心	#1	協力してくれてる町の人達に「協力してくださってありがとうございます。」と感謝の気持ちを伝える
	#2	良いところよりも悪いところの方に目が行きがちだけど、そんな時こそ相手のいいところに目を向ける
	#3	相手についての情報を調べる
	#4	感謝の気持ちを忘れないで、あとそれをちゃんと相手に伝えて
	#5	相手の顔を見ながら喋る
	#6	見る相手の人の気持ちを考えて
協調性	#7	ネガティブな事ばかり言わない
	#8	言わなくてもいい余計な事は言わない
	#9	人も自分も褒められる
	#10	好きとか嫌いとか自分の中であっても上手くに人と付き合う
	#11	失敗してもなにかやらかしても誰も責めない
	#12	無理しないでね、とか優しい言葉をかける
	#13	頷いたり、相槌をうつ、相手の目をしっかりと見て、話を聞く
	#14	関係が気まずい中でも率先して声をかけれる
	#15	「忙しそうだから今は聞くのやめよ」ではなく、忙しくても聞いて協力する
	#16	メンバーに対して、雰囲気を考えたうえで行動・発言が変わるような指摘をする。
積極性	#17	「学校から言われる事・出される課題」＝「面倒臭い・ためにならない」という考えを一回でもいいから捨ててみて
	#18	日常生活でも心のコップの向きを気にしながら過ごす
	#19	成長しないで、学校生活を終えるのはやだなとおもえる
	#20	言われる前に行動する
	#21	自分の意見や提案などをはっきり言える
	#22	話を聞くのが楽しみ、と言葉にする
	#23	話したりしないといけない環境に自分を置く
	#24	待つんじゃなくて、自分からなにか質問や話をしに行く
	#25	社会人の方々に些細なことでも質問する
	#26	街のイベントやボランティアなどに行ってみる
創造力	#27	こんな発表にしたいと考える
	#28	相手が話した言葉を使って、会話の流れを意識した質問をする
	#29	「あれやりたい！、これやりたい！」だけでなく、アレやって何になるの？どうしたらできるの？を考える
	#30	人に今やるべき事の指示などができる
	#31	自分なりの考えを少しでも提示
課題解決力	#32	1歩じゃなくても半歩でも1mmでもいいから勇気出して
	#33	自分の悪いところばかりをみているんだな、と気づく。自分を否定し続けるのはやめる
	#34	前もって準備やリハーサル、情報共有を行う
	#35	「もしかしたら伝わってないのかな」と考える
	#36	安全性を考えて
	#37	逆算して予定を考えるカレンダーを自作
探究力	#38	わからないことをいつまでも分からないままにせずに自分から聞く
	#39	自分がやった行動にスポットライトを当てて次に繋がる改善点を考える
	#40	他の人の言葉に影響を受けて自分のことを考える
	#41	自分とは違う考えに対して、そういう考えもあるんだ、と思える
	#42	ネバギバ！や学校外コンテストに参加する
	#43	人前で話をするときは「失敗したくない」で頭をいっぱいにしないで、「相手に何を伝えたいか」をよく考える

EVICの項目はすべて、
先輩とみなさんの振り返りから抜き出したフレーズです。

Ⅱ　家政科 令和７年度の取組：地域社会への参画

当別高校の家政科では、保育と食物の２コースを設置しています。

１　保育コース：専門性の深化と外部教育力の融合

道内公立高校で唯一「保育」を専門的に学べるコースです。当別町内の認定こども園で実習を核とした学びを展開しています。令和７年度は、札幌大谷短期大学との連携による「音楽リズム・造形指導」や町内の絵本認定士による「読み聞かせパフォーマンス習得」など、外部専門家を活用して、より本物にふれられる授業・実習を展開しています。

月	活動名	活動の様子	生徒の感想
６月 （３年生） ９月 （２年生）	保育実習 連携先： 当別町内認定こども園		先生方のスムーズな動きや沢山の園児たちをまとめる力、子ども一人一人のできること、できないことを把握されてるところなど、見習っていきたいと思いました。
６月 （３年生） 10 月 ２月 （２年生）	音楽リズム 上級学校連携 連携先： 札幌大谷短大保育科		今まで高い声がなかなか出ずに困っていましたが、腰を少し下ろしてお腹に力を入れるという方法を教えてもらい、高い声が出るようになったことがとても嬉しかったです。
７月 （３年生） （２年生）	読み聞かせの基本 連携先： 町内在住絵本認定士		最初に絵本を読み聞かせしていただいた時に、聞きやすく、声の使い分けや、本の開き方などを教えていただきました。お陰で初めての読み聞かせでもスムーズにできたと思います。
10 月 （３年生） 11 月 （２年生）	おとぎキッズ 遊びの広場 連携先： 当別町内の認定こども園		小さな赤ちゃんを抱っこしました。保育人形とは違い柔らかく、温かい感覚で全然違うなと思いました。音があるおもちゃは、気を惹きつけやすいということも学べました。
12 月 （３年生）	卒業制作発表 連携先： 当別町内の認定こども園		卒業制作を通して、考える力や仲間と協力する姿勢、そして責任を持って取り組む大切さを学びました。練習をしていた頃は焦りも無く、作業をこなすことで精一杯でしたが、本番が近づくにつれて、責任や期待も大きくなっていきました。

２　食物コース：多世代交流と「高校生カフェ」の運営

食物コースでは、調理・製菓の技術向上に加え、地域交流を重視して授業展開をしています。

・お弁当販売：生徒考案のお弁当を校内販売「学食ランチ」や地域販売で提供します。
・高校生カフェ：「カフェ」を間借りし、生徒考案ランチ提供を年３回開催。
・多世代交流：当別町社会教育課主催の高齢者講座「ことぶき大学」との合同調理実習。
　　郷土料理の継承と世代間交流を図っています。

月	活動名	活動の様子	生徒の感想
６月 （２年生） （３年生）	学食ランチ 60 食２日間 校内 お弁当販売		６人で準備から提供までしないといけなくて、前日に蒸し忘れとかもあったのでホワイトボードに記録して確認したら、１日目の時よりも上手にできて嬉しかった。
６月 （３年生） ９月 （２年生）	ひだまりカフェ 20 食限定 連携先： 風街カフェ		カフェを借りて、慣れ親しんだ場所ではなく、広さも違い実際に営業者さん視点で実習に取り組め、疲れました。この実習で環境変化に慣れていきたいと思いました。
９月 （３年生）	ことぶき大学 郷土料理調理 連携先： 当別町社会教育課		時間を見て行動して先のことを見据えて考えていくと目標の時間内に間に合いました。目標の時間に間に合うように、何をすればいいのか、考えたらいいのか、と思いました。
９月 （３年生）	自然食 講演・実習 連携先： 元当別役場食堂委託経営者		動物性食材や食品を使わずに、おいしいものを作れたことにびっくりでした。実際に作ってみて、ヘルシーで、味も美味しく、そして楽しく作ることができました。
12 月 （３年生）	卒業制作 卒業レストラン 提供者： 家政科生徒 教職員 保護者	 	学んだ技術や知識を活かし、献立考案、調理、サービスまですべて自分たちで手がけたコースランチを提供できました。多くの方に喜んでいただき、大きな達成感を味わい、貴重な経験ができる環境は決して当たり前ではなく、とても恵まれたものだと実感しています。

３　家庭クラブ：町内の高齢者福祉施設との交流

本校の家庭クラブは、

(1)　高齢者の方々との例年の交流への感謝の気持ちを伝え、思いやりの心と奉仕の精神を養う。

(2)　福祉の仕事への理解を深める。

を目的として、年３回（６月、10 月、11 月）、町内にある３つの高齢者福祉施設を訪問し、交流しています。

主な活動内容は、手遊び歌、歌に合わせてじゃんけん、壁画装飾づくり等、体と頭の体操で楽しんで貰えるように、毎年工夫しています。



Ⅲ　社会で活きる知識と技能の習得：国家資格への挑戦

１　製菓衛生師養成：道内専門学校・菓子企業との連携

令和６年３月に北海道製菓専門学校と本校は連携協定を締結しました。この協定により、令和７年度家政科入学生のうち取得希望者は、２年生から製菓衛生師養成課程の通信教育を受講できます。国家資格の製菓衛生師の取得を目指せるコース導入で、魅力化を図りました。

また、北海道内の製菓・製パン企業５社と連携協定を締結し、企業から奨学金を受けながら長期インターンシップを行う「バイ・ターン」を創設しました。これは、製菓衛生師養成の通信教育に受講料約 20 万円が必要で、家庭の経済的負担を軽減する制度として設計しました。



令和６年４月６日付　北海道新聞】

連携企業は、少子化に伴う製菓衛生師資格取得者の確保や早期離職への対応が課題となっており、高校在学中から企業での研修や職場体験を通して、企業風土の理解やホスピタリティ精神の育成が企業側にとっても、人材育成の観点から大きな意義があると評価され、本取組の実現につながりました。



令和７年度は製菓衛生師資格の取得を希望する生徒 20 名が家政科へ入学し、近年で最も多い入学者数となりました。令和８年度に２年生になった希望生徒は、２年間にわたりオンデマンド 24 回の講義と長期休業中８回の実習を受講し、製菓衛生師国家試験の合格を目指す教育プログラムを開始しました。

２　介護職員初任者研修：道内私立大学・専門学校・福祉事業社との連携

令和８年度から北海道医療大学と介護・福祉専門養成機関サンシャイン総合学園と本校は、連携協定を締結しました。この協定により、令和８年度家政科入学生をはじめ普通科や園芸デザイン科入学生の希望者は、介護職員初任者研修の通信教育を１年間で受講・取得できます。

資格種類	年齢制限	養成機関	
保育士	20歳以上	短大・専門学校修了	保育園、認定こども園、病児・院内保育、放課後等デイサービス
幼稚園教諭	20歳以上	大学・短大・専門学校修了	幼稚園、認定こども園、児童福祉施設
チャイルドマインダー	18歳以上	公益社団法人全国保育サービス協会(ACSA)認定講習受講・認定試験	少人数に特化した家庭的保育
ベビーシッター認定資格	18歳以上		在宅保育サービス
子育て支援員	18歳以上	都道府県実施研修修了	保育補助として保育士のサポート

保育コースでは、資格取得の年齢制限により在学中の実務資格取得が難しく、高卒での保育職採用は厳しい状況にありました。その対策として、保育と関連の深い児童養護施設等で活用できる介護資格の取得機会を設けました。（令和８年度の希望者が不在であったため、今年度は開講しておりません。）

Ⅳ　実録の重み：ケーススタディ「中身を見てよ！米粉まん！」

１　悔しさをバネにした挑戦

令和６年度家政科３年生徒Ｂは、Google の口コミで当別高校がひどく書かれている現状に「今の私たちの活動を見てほしい」と奮起し、地域を巻き込んだオリジナル米粉まんの販売を思いつき、『粘議場』で協力を求めたところ、地域の企業「藤澤製菓」が協力を申し出たことで、町内のイベントで販売する企画が実働します。

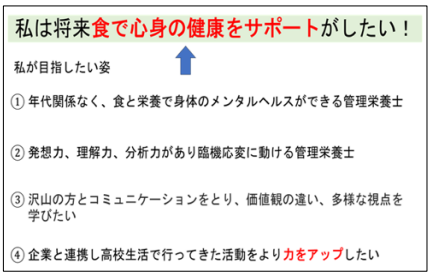


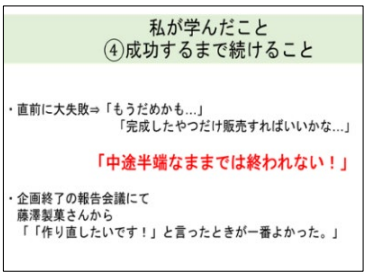
2　失敗を乗り越えた「粘り」

「藤澤製菓」の調理場を借りた試作では、直前に大失敗を経験しました。しかし「中途半端では終われない」と再試作を志願。「藤澤製菓」からも「作り直したいと言った時が一番よかった」と称賛されるプロセスを経て成功に導きました。

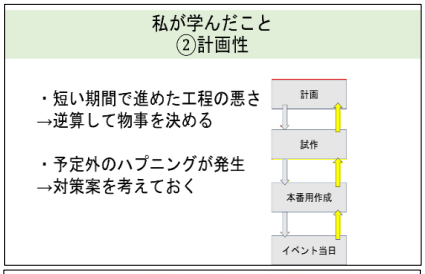
3　成果：完売と将来への志

地元の「ふとみまつり」や「道の駅とうべつ」で計 179 個を完売。アンケートでは「高校生が作ったと思えない」との絶賛とともに辛口の指摘も得ました。生徒Ｂはこの経験を通じ、食でメンタルヘルスを支える管理栄養士を志し、道内私立大学入試の総合型選抜に挑戦して合格、夢に向けて前進しています。











Ⅴ　定量的成果：データで見る教育効果

1　学習意欲の向上

北海道教育委員会は、毎年学びの基礎診断「CBT と学習環境調査アンケート」を実施します。令和６年度調査結果の項目「入学前に比べ学習意欲が高まった」及び「どちらかと言えばそう思う」の本校回答は 62.7%（前年比 4.1 ポイント増）で、「そう思う」は全道平均を 1.9 ポイント上回りました。

●高校入学前に比べ、学習しようとする意欲が高まったか。（　）は前年度

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
本校	32.8%(17.1%)	29.9%(41.5%)	22.4%(24.4%)	14.9%(17.1%)
全道	30.9%(29.6%)	37.8%(37.4%)	20.6%(21.4%)	10.7%(11.6%)

2　学習習慣の定着と学力の変容

本校生徒が自宅等で週末に「全く学習しない」生徒が、前年比 9.8 ポイント減少しました。「30 分以内」、「30 分以上１時間以内」は前年比から微増し、底上げが見られます。

●土曜日や日曜日など学校が休みの日に１日当たりの勉強時間。（　）は前年度

	１時間以上	30 分以上１時間少	30 分少	全くしない
本校	18.0%(24.3%)	13.4%(9.8%)	22.4%(9.8%)	46.3%(56.1%)
全道	43.7%(44.5%)	16.8%(16.1%)	16.3%(15.0%)	23.2%(23.7%)

●ベネッセ「実力診断テスト」：令和６年度入学生の経年変化

【国語】	国公立		私大・短大			実力養成		
１年	0	0	10	5	6	19	16	15
２年	2	2	0	3	13	14	16	18

国語の授業は通常クラスでの指導です。
１年生での上位層が２極化しています。

【数学】	国公立		私大・短大			実力養成		
１年	0	0	2	2	4	9	14	50
２年	1	1	1	2	3	8	7	45

数学の授業は習熟度２展開で指導です。
１年生での上位層・下位層が向上しています。

【英語】	国公立		私大・短大			実力養成		
１年	0	0	0	3	1	7	18	52
２年	0	2	1	1	2	8	20	34

英語の授業は習熟度２展開で指導です。
１年生での上位層・下位層が向上しています。

３　進路実績と地域への愛着

地学協働探究学習を導入してから、当別高校の卒業生の進路では、総合型選抜での大学合格やこれまでは無かった大手企業への就職が実現しています。特筆すべきは、地学協働探究学習によるインターンを通じた郷土愛の醸成により、町内企業への就職者が着実に増加しています。

	大学	短大	専門学校	就職(公務員)	地元企業
Ｒ４	11	3	24	25（1）	1
Ｒ５	8	2	19	16（0）	1
Ｒ６	4	1	22	26（0）	2
Ｒ７	4	3	10	22（2）	3

・道内大手企業等（抜粋）
北海道旅客鉄道(株)、日本通運㈱札幌支店、ブリヂストンリテールジャパン(株)北海道支社、日本郵政(株)北海道支社、株式会社シロみんなの工場、(株)もりもと、小樽洋菓子舗ルタオ、(株)どんぐり、札幌パリ
・地元企業
当別郵便局（窓口）、ハヤカワ建設（建設）、宮永建設（建設）ファームエイジ（農業系）、TOBE（道の駅とうべつ）、田西会館（飲食）

４　家政科卒業生の専門性を活かした進路状況

令和５年度から令和７年度までの家政科卒業生の進路状況を整理したところ、本校で学んだ専門性を活かした進路先へ進んだ生徒の割合は、４年間の平均で70%となっており、多くの生徒が学科の学びを進路選択につなげています。（令和８年度は進路希望調査結果から）

	家政科卒業生数	専門性を活かした進路先	割合	専門性進路内訳			
				保育進学	保育就職	食物進学	食物就職
R5	7	6	86%	5	0	0	1
R6	14	6	43%	2	0	1	3
R7	14	12	86%	4	0	2	6
R8	21	14	67%	4	0	5	5
割合平均			70%				

【本校家政科卒業生の専門性を活かした進路先についての調査】

専門分野別に見ると、保育分野の特徴は進学に特化している点にあります。これは、子どもに関わる資格取得が 18 歳以上を条件としているため、高校卒業時点での資格取得が叶わず、卒業直後の就職が難しいことが要因です。

一方、食物分野の特徴は、進学と就職の双方に道が開けていることです。調理師資格がなくても、食品製造業や食品販売業など、高校卒業後から就業可能な職種が多く存在するため、進学と就職の双方に進路先が広がっていると考えられます。

以上のことから、本校家政科は、生徒の希望進路に応じて専門性を生かした支援を行っており、教育活動が進路実現に結び付いていることが確認できます。今後も各分野の特色や資格制度を踏まえながら、進学・就職の双方に対応したキャリア教育を充実させることが重要であると考えます。

Ⅵ　結びに：なりたい自分を見つける学校へ

本校は、「適切な振り返りができ、街を教室として活動をやり切る人」の育成を目指し続けます。これまでの３年間、地域と高校が共に歩む「地学協働」は、本校の魅力化と持続的な発展を支える重要な方策であると考えています。また、生徒一人一人が地域との関わりを通して自己実現を図り、未来を切り拓く力を育む上でも大きな可能性を有していると考えています。

特に家政科において、人との関わりや地域とのつながりを通して学ぶ教育活動が、生徒の自己理解や進路形成に大きな役割を果たしていると実感しています。家政科の学びは、生活をより良くしようとする実践と他者との協働が基盤です。本校の地学協働探究学習は、家庭科教育の本質を地域社会へ広げた取組であり、生徒が「なりたい自分」を見つける学びとして、今後も発展を目指します。

家庭科専門学科の学びを活かした地域協働の取組

― 継続的な取組とその成果、そして新たなる未来への継承 ―

愛媛県立小松高等学校長　　越　智　真　次

Ⅰ　伝統の継承から次世代への飛躍へ

―「小松高等学校」ライフデザイン科の歩みと「東予総合高等学校」への新たな幕開け―

１　自然と歴史に抱かれた学び舎の原点

本校は、西日本最高峰・石鎚山の裾野へと連なる「養正が丘」に位置し、眼下に広がる道前平野と遠く瀬戸内海を一望できる豊かな自然環境に恵まれています。全校生徒数は362名（令和８年５月末現在）の中規模校であり、最大の特色は、愛媛県内の県立学校において唯一となる家庭科に関する専門学科「ライフデザイン科」を設置している点にあります。本学科では、「家庭」や「生活」に関わる諸事象を多角的・専門的に習得し、将来的に地域社会の発展へ主体的に貢献できる人材の育成を目指してきました。



小松高等学校　全景

２　令和８年４月、東予総合高等学校ライフデザイン科としての新たな出航

本県の県立学校再編計画に基づき、本校の家庭科教育は大きな転換期を迎えました。令和８年度より従来の小松高校は普通科と情報科を併設する新たな形態の「(新) 小松高校」へと移行。これに伴い、本校が誇るライフデザイン科は、地域全体の産業教育を統合・発展させる形で「東予総合高等学校ライフデザイン科」へと移設され、今年４月、新たな幕を開けました。昭和33年の全日制家庭科認可、平成14年の「ライフデザイン科」への学科改編を経て培われた確固たる足跡は、新設校へと確実に受け継がれています。

３　専門性を深化させる２コース制カリキュラム

小松高校ライフデザイン科（２・３年生在籍）では、生徒の興味・関心や進路希望に柔軟に対応するため、２年次より２つの専門コースに分かれる選択制を採用しています。各種技術検定の１級取得を目指した高度な実習や、より専門的な知識の獲得を可能にしています。

〔ライフデザインコース〕　主として衣生活や食生活、住生活、家族関係など、家庭科学の諸分野を総合的かつ深く掘り下げ、高度なものづくり精神や生活創造能力を養います。

〔ヒューマンサービスコース〕　保育、福祉、高齢者福祉、地域社会サービスに力点を置き、多様な他者と共生するためのコミュニケーション能力や実践的な援助技術を習得します。

このように構築された強固な基盤の上で、令和元年度には文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の研究指定を受けました。「生活文化の伝承と多世代交流ー共生のまちづくりに貢献する人材の育成ー」という研究テーマを掲げた３年間の重点的な研究開発は、本校の地域協働の取組を飛躍的に深化させる契機となりました。

Ⅱ　社会に開かれた教育課程の構築

―地域を「学びのフィールド」に変える家庭科専門学科の教育目標と人材育成像―

１　新学習指導要領が求める「社会に開かれた教育課程」の実践

変化が激しく予測困難なこれからの社会を生き抜く子どもたちを育てるためには、学校内だけで完結する教育からの脱却が必要です。今こそ、学校と地域社会が未来のビジョンや教育目標を共有し、連携・協働

しながら教育課程を編成・実施する「社会に開かれた教育課程」の理念が不可欠となります。本校では、文部科学省の指定を受ける前の平成27年度より、愛媛県教育委員会から「地域の担い手育成のための専門科目における指導法の研究」の指定を受け、いち早く活動に着手していました。この時点で既に「地域のスペシャリストとして、他者と協働しながら地域に根差す生徒を育てる効果的な指導方法を研究し、地域と共に育つ意識を持った生徒を育成する」という明確な目標を掲げていました。

この先進的な研究をベースに、令和元年度からの３年間は、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の指定を受けました。これにより、持続可能な社会の構築を見据えた、より体系的かつ先進的な研究へと発展させています。本事業の核心は、生徒自身が明確な課題意識を持ち、生涯にわたって多様な人々と協働しながら地域課題の解決に主体的に行動できる人材の育成にあります。生活文化の継承や地場産業の振興、さらには多世代交流を通じた「共生のまちづくり」に貢献できる地域人材の輩出を目指しました。

本報告では、令和元年度から３年度までの３年間における、本事業の具体的な取組事例とその成果についてお伝えしたいと思います。

２　育成すべき生徒像と地域人材に不可欠な資質・能力

本事業研究を通じて、私たちはこれからの地域社会を支えるために家庭科専門学科が育成すべき具体的な「生徒像」と、それに紐付く「地域人材に必要な力」を以下のように定義づけました。

＜育成したい生徒像＞

①**地域産業への貢献意欲**：地域の産業に従事し、生涯にわたって地域に貢献したいと考える生徒
②**協働的な関係構築力**：多様な立場の人や機関と進んで関係を構築できる生徒
③**専門的探究心とパートナーシップ**：地域の課題を踏まえ、共生のまちづくりのパートナーとして高度な知識・技能を身に付けようとする生徒

＜地域人材に必要な力（身に付けさせるべき６つの力）＞

①**専門的知識・技術**：地域で即戦力として活躍するための技能
②**課題発見力・課題解決力**：地域の潜在的な課題を見つめ、自ら動く力
③**マネジメント力**：課題解決のプロセスを企画・運営する力
④**コミュニケーション能力**：異なる世代や立場の人と協働する対話力
⑤**発想力・企画力・実践力**：地域資源を生かした商品開発などを通してアイデアを形にする力
⑥**表現力・情報発信力**：研究成果をわかりやすくまとめ、社会へ発信する力

私たちはこれらの資質・能力を、単に「課題研究」という一コマの授業だけで育成しようとするのではなく、専門教科「家庭」の全科目（フードデザイン、ファッション造形、子どもの発達と保育など）や「福祉」の各科目に重層的に位置付けました。

Ⅲ　地域資源を活かした３つの探究テーマと実践
－「椿」・「はだか麦」・「魚食」がつむぐ多世代協働・商品開発の具体策－

持続可能な地域社会を構築するためには、生徒たちが机上の空論ではなく、実際の地域課題に直面し、汗を流す実践の場が必要です。本校では、西条市（旧小松町を含む地域）が抱える特有の課題と地域資源に着目し、以下の「3つの柱（テーマ）」を設定して探究活動を展開しました。

【地域課題解決へ向けた３つの探究テーマ】

テーマＡ：「椿の香りと文化」のまちづくりの活性化（歴史文化・観光資源の多角化）
テーマＢ：生活文化・生活産業の振興（はだか麦や地産地消、魚食文化の継承）
テーマＣ：地域コミュニティの活性化（多世代交流の拠点づくりと再構築）

○ 以下にＡ・Ｂ・Ｃのそれぞれのテーマにおける具体的な実践内容の一部を紹介します。

１　テーマＡ：「椿の香りと文化」のまちづくりの活性化

西条市小松町は歴史的に椿との縁が深く、「椿の香りと文化」を掲げたまちづくりが官民協働で進められ

てきました。しかしながら、椿の栽培自体は一部の愛好家による活動に留まっており、一般市民や県内外への認知・PR は極めて不十分であるという課題を抱えていました。そこでライフデザイン科の生徒たちは、従来の「観賞用」という椿の価値観を打ち破り、地域資源を多角的な視点から研究し、新たな付加価値を創出する特産品開発や文化的アプローチに取り組みました。

（1）椿文化に関する専門講義の受講

本校の卒業生も多数在籍する「小松つばき会」の方々を講師に招聘。本校の歴史や、地域に深く根差す「篤山椿*（とくざんつばき）」をはじめとする椿文化のルーツを体系的に学びました。先人たちが守り抜いてきた歴史のバトンを自分たちが受け継ぎ、次世代へとつないでいくことの重要性を強く実感する契機となりました。



篤山椿

＊ **篤山椿**：ふっくらと肉厚な、白い一重の花を咲かせる中輪（直径6～9cmほど）の椿である。江戸時代の小松藩の儒学者で「伊予聖人」と称えられた近藤篤山（とくざん）が、生前に深く愛し、大切に育てたと伝えられている。彼の名を冠したこの椿は、伊予つばき協会の「名花20選」にも選ばれており、小松地域を代表する名木として広く知られている。

（2）「うちぬき氷プロジェクト」への参画とグランプリ獲得



西条市が世界に誇る名水「うちぬき」の自噴井（じふんせい）から湧き出る水を使用した、オリジナルかき氷のメニューコンテストに挑戦しました。地域のシンボルである「椿」をかき氷という食として表現し、小松の「椿薫る歴史と文化」を広く発信することを目指しました。開発にあたっては、地元のコラボレーション店舗の職人や経営者と何度も打ち合わせを重ね、味のバランス、椿の花を模した視覚的演出、調理の工程をブラッシュアップしました。市内５つの高等学校が参加した本コンテストにおいて、本校ライフデザイン科チームは見事、開発背景が高く評価された「ストーリー賞」、そして総合優勝にあたる「グランプリ賞」のダブル受賞を達成しました。

（3）来園者の“知りたい”を形に！「椿千年の森」環境整備ボランティア

地域の貴重な観光・自然資源である「椿千年の森」の環境整備活動に、ボランティアとして参画しました。園内に植えられた無数の椿の開花写真を１枚ずつ整理し、専門的な知見から品種の正確な判別を実施。その上で、来園者が一目で品種を理解できるよう、耐久性とデザイン性を兼ね備えた「椿のネームプレート」を製作・設置しました。この活動を通じて、地域社会に実質的な貢献を果たす喜びと達成感を得ることができました。

（4）椿をモチーフとしたクリーニングバッグ（エコバッグ）の共同開発

プラスチックゴミ削減という環境課題に対し、生活の利便性と地域文化の発信を両立させる実践力を養うため、地元のクリーニングチェーン店と連携したエコバッグの開発に取り組みました。取り組みの中では、バッグのロゴマークや全体デザインを生徒が考案し、校内投票だけでなく、実際の店舗網を通じて一般のお客様を対象とした大規模な店頭投票も実施しました。地域の方々の声をダイレクトに反映して完成した「椿のクリーニングバッグ」は、実際に店頭で販売され、地域の環境意識を高めるとともに、椿ブランドの普及に大きく貢献しています。

（5）地域を結ぶ「椿のコサージュ」製作・寄贈プロジェクト

小松の「椿文化」を世代を超えて受け継ぐため、人生の節目である卒業式に贈る「椿のコサージュ」の製作を企画しました。プロのフラワーデザイナー・玉井初美氏を講師に迎え、高度な造花技術や色彩構成についての講義と実習を実施。生徒たちが一針一針心を込めて手作りしたコサージュは、地元の小松小学校・小松中学校の卒業生全員にプレゼントし、式当日の胸元を華やかに彩りました。地域の小・中・高校の絆を深める象徴的な活動として、多くの感動を呼んでいます。

２　テーマＢ：生活文化・生活産業の振興

西条市は、瀬戸内の温暖な気候と名水「うちぬき」のおかげで、はだか麦（生産量全国一）、ほうれん草、絹かわなす、春の七草など、全国に誇るべき一級品の農産物が極めて豊富です。また水産業においても、のり養殖に加え、ワタリガニやシャコ、サワラなど「西条ブランド」と呼ぶべき海の幸が豊富に存在します。しかしながら、全国的な知名度は未だ低く、家庭における魚食文化の衰退も深刻であり、貴重な食文化が若い世代へ継承されていないという強い危機感がありました。これらの生活産業・文化を振興するため、生徒たちは行政や地場産業とタッグを組み、新たなレシピや加工品の開発に取り組みました。

（１）はだか麦の可能性を拓く専門講義と商品開発

①はだか麦に関する基礎講義

東予地方局産業経済部産業振興課の専門官を講師に迎え、「はだか麦とは」をテーマに受講。西条市が全国一の生産量を誇る背景、歴史的変遷、生産量の推移、そして現代における消費低迷という厳しい現状や課題をデータから論理的に学び、知識のベースを強固にしました。

②プロ直伝のパン作り講習会

地元小松町の人気ベーカリー「にじとまめ」の店主を招聘し、「ミニ食パンを作ろう」というテーマのもと技術講習を受講。製パン理論やはだか麦粉を配合した際の生地の挙動、発酵のコントロールなど、プロの高度な技術を体感しました。

③はだか麦を用いた商品開発の実践

上記の学びを活かし、はだか麦の消費拡大と認知度向上を目指したオリジナル菓子のレシピ考案に着手。試作と成分調査、原価計算などを繰り返し、商品化に向けたベースを構築しました。

（２）魚食文化の復興を目指す講習会とコンテストでの快挙

①お魚料理講習会の実施

西条市河原津（かわらづ）漁協の漁業女性部の方々を講師に迎え、地元で水揚げされる新鮮な魚介類を用いた調理実習を実施。アジを三枚におろすという魚調理の基本中の基本を体得しながら、地元の魚魚（とと）文化の豊かさを五感で学び、伝統的な「南蛮漬け」などの郷土料理へと仕上げました。

②魚を使った市内「料理コンテスト」での活躍

若者の魚離れを食い止めるため、「若者自身が毎日食べたくなるスタイリッシュな魚食レシピ」の考案に挑戦。実態調査のアンケート結果を分析し、試作と改良を重ねて「シーフード料理コンクール」等の外部コンテストに果敢にエントリー。ハイレベルなプレゼンテーション審査を経て、見事「優勝（最優秀賞）」の栄誉に輝きました。この快挙に伴い、地元関係者を交えた華やかな優勝作品レセプションも開催され、生徒の自信は頂点に達しました。

③学校給食メニューへの導入と地産地消の推進

魚食普及を単発のイベントで終わらせないため、西条市内の小中学校の学校給食メニューとして導入することを目指し、1食分の献立開発に挑戦しました。栄養バランス、大量調理における作業効率、コスト制限というプロと同じ制約の中で開発を進め、見事に採用されました。この取り組みにより、地域の子どもたちへ直接的に魚食文化を浸透させる仕組みを構築しました。



「鯛と里芋のコロッケ」



「鯛塩ラーメン」

学校給食に採用されたメニュー

３　テーマＣ：地域コミュニティの活性化と多世代交流

核家族化や少子高齢化、人口減少が進む西条市において、地域内の人間関係の希薄化やコミュニティの相互扶助機能の低下は大きな課題となっています。この課題に対し、生徒たちは高校生ならではの瑞々しい感性とフットワークを活かし、子育て世代から高齢者までが自然に集い、互いに学び合える出張型多世

代交流拠点「まちかど家庭科室～ふらっと～」を立ち上げました。本活動は、外部委託によるイベントや「指示されて参加するボランティア」とは一線を画します。生徒自身が企画書の作成から予算管理、資材準備、当日の進行、リスク管理までをすべて主体的に担う、本格的な「イベントマネジメント」の手法を取り入れた、生徒主導の運営体制が最大の特徴です。

（1）FC 今治「ありがとうサービス．夢スタジアム」での大規模実践

日本のプロサッカーリーグ（J リーグ）で活躍する「FC 今治」のホームゲーム開催日に合わせ、スタジアム内の特設ブースに「まちかど家庭科室～ふらっと～」を開設。来場した多くのサポーターや子どもたち、高齢者に対し、自作の「椿のクッキー」を配布。さらに、生徒が考案した「椿釣りゲーム」や「椿の輪投げ」、消しゴムを彫って作った「手作り消しゴム判子体験」などのワークショップブースを運営しました。スポーツの熱気の中に家庭科の温もりを融合させ、数千人規模の来場者との間で国籍や世代を超えた多世代交流と椿文化の広報を見事にやり遂げました。



まちかど家庭科室～ふらっと～

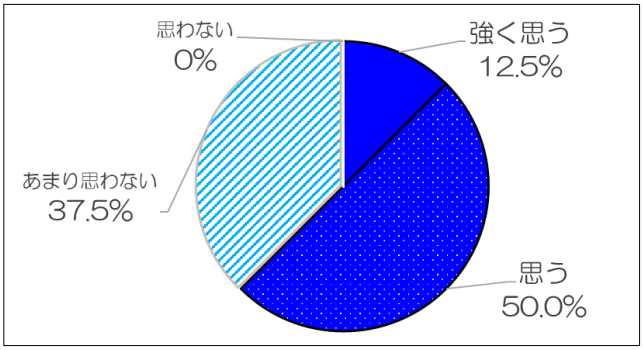
（2）小松公民館「小松文化祭」における地域密着型実践

地元の生活に密着した「小松文化祭」において、地域住民との更なる深い交流を目指して「まちかど家庭科室～ふらっと～」を出展。この日のために生徒たちがレシピを開発し、自らの手で調理した「特製・魚食弁当」の限定提供・販売を敢行。さらに、椿のクッキー販売や店頭での消しゴム判子体験、高齢者の方々との対話スペースを創出しました。「高校生が作ったお弁当を食べられて元気が出た」「小松の椿の歴史を丁寧に教えてくれて嬉しかった」といった高齢者の方々からの生の声に触れ、生徒たちは地域コミュニティの再構築における自分たちの存在意義を強く実感しました。

Ⅳ　教育改革推進事業がもたらした生徒の成長と変容

教育改革推進事業がもたらした生徒の変容について考察しました。先述したⅡ－２に掲げた「育成したい生徒像」の３つの観点についての達成度を測るため、本事業のカリキュラムを３年間履修したライフデザイン科３年生（令和３年度卒・31 名）を対象に、３種のアンケートを実施しました。

観点①　「地域の産業に従事し、生涯にわたって地域に貢献したいと考える生徒」の割合を調査しました。本事業に関わる前の自身と比較し、「将来、地元に貢献したい（関わりたい）と思うか」という問いに対し、62.5%の生徒が「強く思う」または「思う」と回答しています。この結果から、生徒たちに郷土愛や地域貢献への強い意欲があることがうかがえます。



【 アンケート調査 結果① 】
「将来、地元に貢献したい（関わりたい）と思うか？」

観点②　「多様な立場の人や機関と進んで関係を構築できる生徒」に関する 72 項目のアンケートを実施（上段：令和２年７月、下段：令和３年 12 月）し、「できるようになった」と回答した割合（肯定率）の変化に注目しました。変化の大きかった項目を上位から順に見ると、「学校外のいろいろな人に話を聞きに行く」が 42.1 ポイント増、「自主的に調べものや取材を行う」が 35.0 ポイント増と大幅な伸びを示しました。これは、事前調査や研修先で事業所の方々に意欲的に質問した成果の表れといえます。

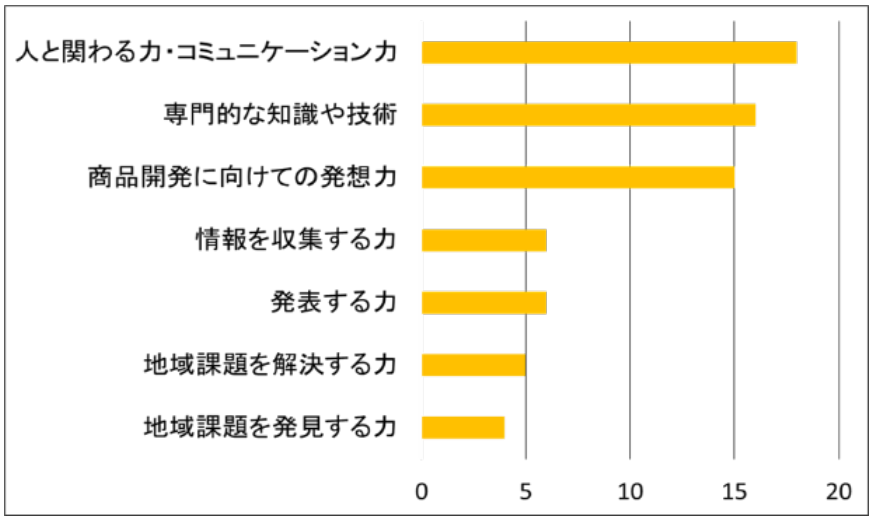
質　問　項　目	肯定率（%） （4点法のうち「4」「3」と答えた生徒の割合）	比較増減 （%）
q2.学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	31.3 73.3	＋ 42.1
q1.自主的に調べものや取材を行う	25.0 60.0	＋ 35.0
q5.活動、学習内容について大人(教員や地域の大人)と話し合う	46.9 80.0	＋ 33.1
q7.話し合った内容をまとめる	53.1 76.7	＋ 23.5
q22.立場や役割を超えて協働する機会がある	50.0 73.3	＋ 23.3
q21.自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	46.9 66.7	＋ 19.8
q36.うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む	40.6 60.0	＋ 19.4
q6.自分の考えを文章や図表にまとめる	31.3 50.0	＋ 18.8
q3.グループで協力しながら学習や調べものを行う	68.8 86.7	＋ 17.9
q10.地域の魅力や資源について考える	65.6 83.3	＋ 17.7
q24.将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる	53.1 70.0	＋ 16.9
q45.学習を通じて、自分がしたいことが増えている	37.5 53.3	＋ 15.8
q46.情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	34.4 50.0	＋ 15.6
q12.日本や世界の課題の解決方法について考える	28.1 43.3	＋ 15.2
q30.自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会がある	56.3 70.0	＋ 13.8

【 アンケート調査 結果② 】　「肯定率の変化」（全質問 72 項目中の一部の結果を抜粋）
上段：令和２年７月　　下段：令和３年 12 月

※ グラフ内の数字は、４件法の「４」「３」の回答割合（肯定率）を示す。
４＝よくする／よくある／あてはまる
３＝時々する／時々ある／どちらかといえばあてはまる

観点③　「地域の課題を踏まえ、共生のまちづくりのパートナーとして高度な知識・技能を身に付けようとする生徒」に関して、本事業を通じて「どのような力が身に付いたか」を尋ねるアンケート（対象：３年生 31 名）を実施しました。その結果、半数以上の生徒が「人と関わる力・コミュニケーション力」を挙げました。地域の様々な世代の方々と課題について話し合い、意見を交わす中でコミュニケーション能力が磨かれ、相手の意図を深く理解しようと努める姿勢が身に付いたと考えられます。また、自由記述欄では、「自分に自信がなく、否定されると投げ出していたけれど、人と上手に関わることで認められ、自分にも自信が持てる気がした」という声も見られました。他者との関わりを通じて自己肯定感が高まり、生徒自身が確かな成長を実感している様子がうかがえます。

さらに、ライフデザイン科という専門学科の特色を生かして研究を進めたことで、約半数の生徒が「専門的な知識や技術」「商品開発に向けての発想力」が身に付いたと回答しており、専門教育ならではの確かな成果も表れています。



【 アンケート調査 結果③ 】　本事業を通じて「どのような力が身に付いたと思うか？」

Ⅴ　結びに

本事業では、生活文化・生活産業の振興や、多世代交流による地域コミュニティの活性化など、地域と協働して行う「地域課題解決学習」を通し、地域に貢献する人材の育成を目指してきました。アンケート分析や生徒の振り返りからは、当初のねらいが概ね達成されたことがうかがえます。初めは教員主導の活動であっても、人との関わりの中で喜んでもらえる体験を重ねることで、生徒たちは自己有用感や郷土愛を高め、自信を深めていきました。その結果、この体験を原動力に主体的に活動する生徒や、人前で堂々と意見を発表できる生徒が増加しました。こうした地域での学びを経て、生徒たちが今後の生き方を深く見つめ、明確なビジョンを持って卒業後の進路決定に至ったことは、大きな収穫であると言えます。

本校は、令和９年度の卒業生を送り出した後、閉校することとなりました。昭和 33 年度に全日制家庭科として設置されてから約 70 年。平成 14 年度の学科改編により「ライフデザイン科」となってからも、社会で広く活躍する多くの有為な人材を輩出してきました。小松高校ライフデザイン科で培われた地域協働の学びは、生徒たちの心に深く根付いています。卒業生たちが将来にわたり、それぞれのフィールドで自分らしく輝き、地域を支え貢献する存在として活躍してくれることを心から願っています。

生徒の主体性を伸ばす生活デザイン科の特色ある取組
～農業に関する学科との連携を通して～

福岡県立福岡農業高等学校長　　平　田　陽　一

Ⅰ　はじめに

福岡県立福岡農業高等学校は、1879 年に現在の福岡市中央区中洲に農学所として創立された 148 年の歴史を重ねてきた学校です。本校は、農業に関する 3 つの学科と家庭に関する 1 つの学科で構成する専門高校です。本校は、太宰府天満宮で有名な太宰府市に位置しており、周囲には福岡市をはじめ人口密集地の中にあります。生徒は、専門的な知識や技術の修得に止まらず地域住民との交流活動も積極的に取り組み、農産物販売会やミカン狩り、芋掘り体験等に延べ約 5000 人が来校する地域の食農教育拠点校として教育活動を進めております。学んだ事を積極的に地域との交流の場を活用して社会で活用できる力に高めることをねらい、主幹教諭、教頭、そして校長として農業系３学科と生活デザイン科が一緒に取り組んだ内容を元に、開かれた学校づくりの一部を紹介いたします。

Ⅱ　学校概要

福岡県立福岡農業高等学校は、太宰府市に所在する、農業に関する学科（都市園芸科、環境活用科、食品科学科）と家庭に関する学科（生活デザイン科）を有する専門高校です。生活デザイン科は生活産業における将来のスペシャリストの育成を学科の目標としています。そのため、フードはもちろんファッションや保育、福祉などの生活産業に関わる専門的内容を学習しています。

生活デザイン科での履修科目及び単位数

学年	科　目　名	単位数
1	生活産業基礎	2
	生活と福祉	2
2	フードデザイン	4
	ファッション造形基礎	4
	生活産業情報	2
	服飾手芸（選択）	2
3	子どもの発達と保育	4
	課題研究	3
	ファッション造形	5
	調理	
	ファッションデザイン	2
	栄養	

Ⅲ　生活デザイン科の特色ある取組

１　九州国立博物館での学校発表会（H27 年）

（１）きっかけ

平成 26 年に赴任した本校家庭科教員が、生活デザイン科を地域にアピールするための方策として、学校外でファッションショーを行う案を管理職に提案していました。実施会場について相談を受けた当時の校長が、本校と同じ太宰府市にある九州国立博物館のホールを借用できるのでは、という助言をしました。九州国立博物館にアポイントを取ったところ、平成 27 年度の九州国立博物館開館 10 周年にあわせて、10 日間地域の学校などに施設を開放することが分かりました。急遽、10 日間の１日を福岡農業高校学校発表会という形でホールやロビーを使用できることになりました。農業に関する学科の学習成果や文化部（太鼓部、書道部）のパフォーマンス、生活デザイン科のファッションショーと茶室で生徒たち発案のお菓子の提供を行いました。

（２）梅染と野菜や果物の衣装製作

ファッションショーに使用する衣装をデザインする中で、太宰府市の花である梅に関係する作品を製作したいという生徒からのアイデアを生かし、梅染めに挑戦することを計画しました。食品科学科が大宰府政庁跡の梅を収穫し、その加工品の商品開発を行っていることから、剪定後の梅の枝を手配していただくことができました。秋月（福岡県朝倉市）にある草木染の工房から講師を招いて、染色液の作り方、染め方等を詳しく教えていただきました。梅の枝を農業科の機械を使用しチップ状に砕き、それを煮出して染色液を作り、絹布を梅柄になるように絞り染めを行

いました。濃度を変えることで優しいベージュ色、黄金色の布に染め上げ、ドレープで梅の花びらを表現したドレスを製作し発表しました。

また、本校で栽培している野菜と果物をモチーフにした衣装も製作し、好評を得ました。



梅染の様子



野菜と果物の衣装

梅染の布で製作したドレス

（３）九州国立博物館での学校発表会を終えて

この取組を通して、すべての学科が連携して一つのイベントを成し遂げたことは大きな成果だったと思います。しかし、準備期間が短く、教員集団として組織的に計画を立てることができなかったこと、生徒たちが主体的に活動する場が限られていたことが課題となりました。生徒たちが主体的に活動できるように、教員が計画的に導くことが重要であると再認識しました。

２　高校生プロデュースによる「福農 Happy Wedding」（H27～H30 年）

（１）きっかけは保護者の一言

平成 27 年の 11 月ファッションショーを観てくださった保護者から「福農ではウェディングドレスもブーケもケーキも作っているし、どれも高校生が作ったとは思えないくらい素晴らしい作品だから、本当の結婚式ができるのでは」と生活デザイン科の教員に声をかけていただいたことがきっかけでした。折しも平成 30 年度、本校が創立 140 周年記念の年に当たることから、生徒と話し合い、平成 30 年に高校生プロデュースする本当の結婚式を創立 140 周年の記念イベントとして行うという目標を立てました。そこから逆算して、日程の計画（下表）を立てました。

平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
・パンフレット作成のための ・ドレスやケーキの試作と製作 ・校内桜坂での写真撮影等	・パンフレットの作成 ・模擬結婚式の実施 ・実行委員会発足 ・新郎新婦の公募及び決定	・実行委員会と新郎新婦の打合せ（式の詳細決定） ・「福農 Happy Wedding」実施

（２）模擬結婚式

平成 28 年度の本校文化祭のイベントの１つとして、本校正面玄関前で生徒を新郎新婦に見立てて、模擬結婚式を実施し、多くの方に本校でこのような結婚式をあげることができるとＰＲ活動を行いました。生徒たちの希望で、結婚式の一連の流れを知るために実際の結婚式場に出向いて調査活動も実施しました。



模擬結婚式の様子

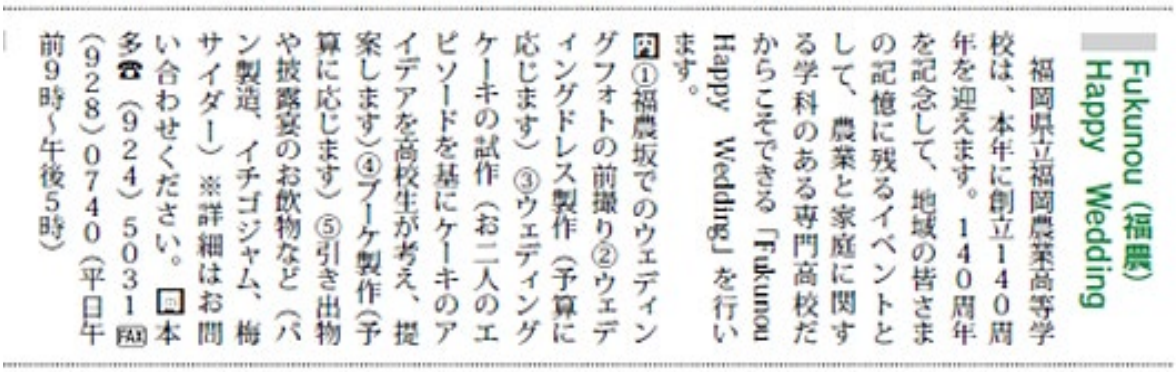
当日、観に来ていただいた方にブーケトスや、新郎新婦退場のシーンではフラワーシャワーに参加していただきました。また、作成したパンフレットを配布し、次年度本当の結婚式のための新郎新婦の募集を呼びかけました。

模擬結婚式については、生活デザイン科３年生の生徒を中心に行いましたが、この様子を観て「福農 Happy Wedding」の全体像が見えたことから、生活デザイン科の２年生はもとより、他学科の生徒たちも平成 30 年度「福農 Happy Wedding」実施への意欲の高まりがみられました。




模擬結婚式の様子

模擬結婚式後、他学科も含めて実行委員会を立ち上げました。実行委員長はウェディングプランナーになるために進学を希望している生活デザイン科の生徒が立候補してくれました。平成30年２月号の「太宰府市政だより」に創立140周年記念イベントとして高校生プロデュース「福農Happy Wedding」の新郎新婦一般公募の記事を掲載していただきました。するとそれを見た本校卒業生からぜひ母校で結婚式を挙げたいと連絡がありました。



Fukunou（福農）
Happy Wedding

福岡県立福岡農業高等学校は、本年に創立140周年を迎えます。140周年を記念して、地域の皆さまの記憶に残るイベントとして、農業と家庭に関する学科のある専門高校だからこそできる「Fukunou Happy Wedding」を行います。

内①福農坂でのウェディングフォトの前撮り②ウェディングドレス製作（予算に応じます）③ウェディングケーキの試作（お二人のエピソードを基にケーキのアイデアを高校生が考え、提案します）④ブーケ製作（予算に応じます）⑤引き出物や披露宴のお飲物など（パン製造、イチゴジャム、梅サイダー）※詳細はお問い合わせください。内本多☎（924）5031 FAX（928）0740（平日午前9時～午後5時）

一般公募　太宰府市政だより

（３）「福農 Happy Wedding」（H30 年）

平成 30 年４月から教務部にお願いして「課題研究」の授業時間を４学科で統一し、その時間を使って実行委員が新郎新婦と打合わせや結婚式に向けての準備を行っていきました。

当日は、新郎新婦の両親、友人を招いての本当の結婚式を実施しました。本校の中庭全体を使用して式場を作り上げ、教室棟の各階から生徒たちが祝福できるようにしました。

各学科の結婚式に向けての行った主な取組一覧を下の表に示します。

生活デザイン科	・ウェディングドレス　・ウェディングケーキ　・招待状
都市園芸科	・ウェディングガーデン　・ウェディングブーケ
環境活用科	・新郎新婦から両親へのお礼の品（新郎新婦の出生時の体重と同重のお米） ・ケーキの材料（卵）提供　・中庭の剪定
食品科学科	・引き出物　（ パン・　新郎新婦の似顔絵ラベル付き梅ジャム・梅サイダー）



福農 Happy Wedding 当日の様子



福農 Happy Wedding 当日の様子

（３）「福農 Happy Wedding」を終えて

当日は、融資を中心としたフラッシュボブや吹奏楽など、全校生徒が関わっての高校生プロデュースの心温まる結婚式を実施することができました。また、多くのテレビや新聞の取材もあり、福岡農業高校のアピールにもつながりました。実行委員長の生徒は「一人一人が最後まで役割に責任を持ち、自分の仕事を行い、式当日には達成感を感じることができました。今回式を挙げられたお二人にとっても特別な日になられたと同時に、生徒たちで作りあげたこの結婚式はとても貴重な経験になりました。ウェディングプランナーの夢を必ず叶えたいと改めて思いました。」と感想を書いていました。この取組は、目的意識をもち、生徒たちが主体的に考え、これまで学んだ知識と技術を活かして成し遂げた価値あるものだと思います。　しかし、140 周年記念のイベントということもあり、予算の面から考えても毎年継続的に実施できるものではないことが課題であると考えます。活動を振り返り、課題解決しながら継続的に地域貢献できる取組の必要性を痛感しました。

３　野菜・果物シスターズの取組

（１）野菜・果物シスターズ誕生

平成 27 年 12 月毎年実施している保育園実習に行く計画を立てている時、九州国立博物館でのファッションショー時に発表した野菜と果物の衣装を着用したいと生徒たちから申し出がありました。一緒に外遊びはできないため、食に関する紙芝居を作成して読み聞かせを行うこととし、保育園に出向きました。子どもたちが、思っていた以上に野菜と果物の衣装に興味・関心を持ってくれ、紙芝居も熱心に聞き入ってくれました。また、保育士さんが衣装に対して大絶賛で、野菜や果物の種類を増やしてほしいとの要望もありました。保育園実習後の生徒の感想には、他の保育園とかにも行きたい、何かもっと活躍できる場があるといい、と書かれていました。

そこで、生徒たちに保育園実習の様子を写真付きで「野菜・果物シスターズ、食育活動行います」のチラシ１枚を作成させ、管理職、農業科の先生に相談しました。すると「事務室勤務の方は、県庁のいろいろな部署に知り合いがいらっしゃるのでは？」と助言があり、事務職の方つながりで「学校給食フェア」の食育クイズのお手伝いをしてほしい、との依頼を受けました。教職員だけでなく学校事務職の方に協力を仰いだことが大きなターニングポイントになったと考えます。

平成 27 年度「学校給食フェア」（３月開催）では、２名の「福岡うまかもん大使」方の「食育クイズ大会（○×クイズ）」のお手伝いとして「野菜・果物シスターズ」と銘打って初登場しました。参加してくれた子どもたちはもちろん主催者の方にも大好評でした。

（２）　野菜・果物シスターズの活躍

平成 28 年度に入ってすぐ、７月の福岡県栄養教諭研修会で「野菜・果物シスターズ」の食育活動をアピールしてはどうか、という話をいただきました。研修会の中で、生徒たちは衣装を着て登場し「学校給食フェア」の様子や自分たちが子どもたちに食育を伝える意義、何かお手伝いできることがあれば声をかけてほしい、と栄養教諭の先生方に訴えました。すると研修会終了後す

ぐに福岡県嘉麻市の「学校給食フェア」で食育クイズ大会を行ってほしいと依頼があり、自分たちで問題を考えて初めての食育クイズ大会を行いました。

「野菜・果物シスターズ」の活躍が新聞で紹介されると、福岡市にある玄米和食で有名な「社会福祉法人福栄会　高取保育園」から「ぜひ保育園に来て、野菜・果物シスターズの食育活動をしてほしい。」という依頼をいただきました。また、本校の近隣にあるＪＡ筑紫のイベントにも声をかけていただきました。さらに、平成 28 年度の「学校給食フェア」からは、「福岡農業高校生活デザイン科　野菜・果物シスターズによる地産地消・食育クイズ大会」として、プログラムの一部になりました。

（3）野菜・果物シスターズの継続的活動に向けて

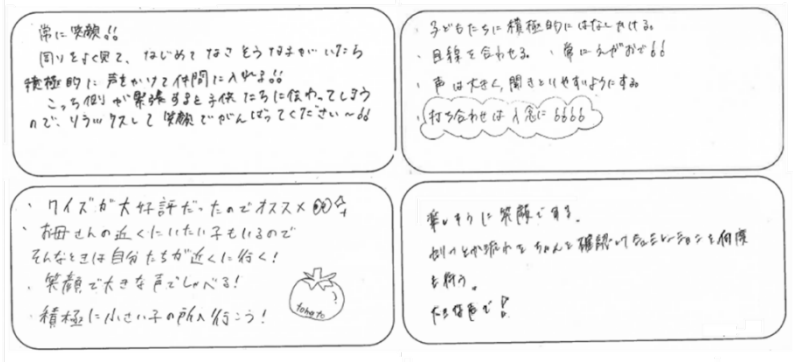
「野菜・果物シスターズ」の活動が認められ、活躍の場が広がったので、継続的に活動できるように３つの手立てを仕組みました。まず１つは、下表のように生活デザイン科３年間の授業の中で、計画的に取り組んでいることです。

学年	教科名	内　　容
１年	「生活産業基礎」	「野菜・果物シスターズ」の活動の紹介
２年	「フードデザイン」	食育クイズ・かるたの内容検討
３年	「課題研究」	「野菜・果物シスターズ」の衣装製作　文化祭で発表（毎年）
３年	「生活産業情報」	食育クイズプレゼン作成
３年	「保育基礎」「課題研究」 学校家庭クラブ	「野菜・果物シスターズ」の活動計画練習、活動、振り返り



文化祭での発表と食育クイズ大会の様子

手立て２は、１つの活動を終えたら、次の活動をする人へのアドバイスを書くメモを準備し箇条書きでもいいので伝えたいことを端的にまとめるようにさせています。そのメモを次に活動する生徒たちに提示することで、課題を発見し、その課題解決に向けてどう取り組むかを生徒たちに考えさせています。



手立て３は、農業クラブ活動であるの校内プロジェクト発表会（全校生徒に向けて）の中で、生活デザイン科も３年生が自分たち「野菜・果物シスターズ」の取組を発表する場を設け、前年までの課題を基に衣装を工夫して製作したことや、出向いた小学校や保育園からのお礼の手紙を紹介しています。後輩たちに「野菜・果物シスターズ」の活動をより良いものに改善しながら引き継いでいってほしいと伝える貴重な機会となっています。



生徒が校内プロジェクト発表のために作成したスライドの一部

４　結びに

生徒の主体性をテーマに本提案をいたしました。生徒の主体性を伸ばすためには「自分で考え、自分で決め、自分で行動し、その結果を振り返る」という経験を日常的に積み重ねることが大切だと感じています。そのためには、生徒に「選択する機会を与える」、「なぜ学ぶのか」を考えさせる、成功体験を積み重ねる、振り返りを習慣化させる等の教育上の工夫が必要だと考えます。本県において、家庭科教諭の不足は喫緊の課題です。社会のニーズ、地域の要請、生徒の経験値とスキルを総合的に見取り、適切な指導や助言を加え支援できる教師の存在は、将来の日本を支える生徒たちの資質や能力の向上にとって必要不可欠だと考えます。教育は国家 100 年の計という言葉があります。人材育成こそ国家の要であり、また 100 年後の日本を支える人物をつくるために長期的視点で人を育てることの大切さを説いた名言です。生徒はもとより生徒を指導や支援する教員の人材育成はさらに重要です。人材育成は、その取組を進めても目に見える効果としすぐに現れるものではありませんが、教職員の人材育成は学校教育目標の達成に向けて欠かせないものです。人材育成により教職員が成長すれば、それまで業務にかかっていた時間や労力が減り、生徒に向き合う時間も増えます。効率が上がるだけでなく、教育の質の向上にもつながります。それにより、教職員の勤務時間を縮減でき、効率化を通じて質の高い教育の提供にもつながります。また、教職員の生活改善に資するものとなります。人材育成により教職員一人ひとりが成長すれば、校長が掲げる学校教育目標や目的の達成に向けて、各教職員が主体的に行動できるようになります。業務の中で適切な判断・行動ができれば、結果的に教育の充実度が高まります。一方、「自校の教育活動のために、自分がするべき仕事（役割）は何か」を理解できないまま与えられた業務をこなしている受け身の教職員では業績への貢献は望めません。自主的に仕事に取り組む人材の育成は必要不可欠です。人材育成は、単に仕事ができるように人を育てるだけではありません。各学校の戦略目標の達成に欠かせない人材を育てることは、「自校の目標達成に向けて、どのように行動すべきか」を教職員自身が自主的・自律的に考えて行動できれば、組織としての目標への達成度は高まります。変化し続けている社会や経済環境で、管理職として人材育成は生徒たちの明るい笑顔を増やすために欠かせません。まず、我々教師自らが試行錯誤を大切にし、教師自らが自分の意志を固め、行動できる活力のある学校を目指し盛り上げていきましょう。今回、このような発表の機会をいただき感謝申し上げます。

普通科高校における家庭科教育について
～生活者を育て、ウェルビーイングをひらく～

栃木県立佐野東高等学校長　　山　﨑　貴　史

Ⅰ　はじめに



本校の校章

栃木県立佐野東高等学校は、栃木県西部の佐野市と足利市を中心とした通学圏から生徒が集う普通科高校です。進学指向の学習環境と地域に根ざした教育活動を両立する「地域型進学校」として位置づけられています。校風は落ち着いており、基礎学力の定着を重視した丁寧な授業運営と生活指導が特徴です。１年次は学習習慣の確立に重点を置き、２年次以降は進路希望に応じた科目選択を通して、生徒一人ひとりの進路実現を支援しています。

明治 40(1907)年に安蘇郡立佐野高等女学校として創立され、昭和 26 年に栃木県立佐野女子高等学校と改称し、平成 19 年に創立 100 周年を迎えました。平成 23 年に男女共学普通科の栃木県立佐野東高等学校として開校されました。平成 24 年には家政科の閉科に伴い普通科のみの設置となり、令和８年度で創立 119 周年、佐野東高等学校として 15 周年を迎えた伝統校です。

本校正門を入って左手に佇む「あやめ塚」の句碑には、「ほととぎす　鳴くや五尺の　あやめ草」という松尾芭蕉の一句が刻まれています。芭蕉の句碑としては最古のものとされています。初夏の自然美と静けさの中にある凛とした情景は、生徒たちが自分の信じる道を静かに、しかし力強く進む姿とも重なり、本校の校是『啓（けい）～知を啓き　心を啓き　新しい伝統の扉を啓く～』とも深く響き合います。



佐野市の位置

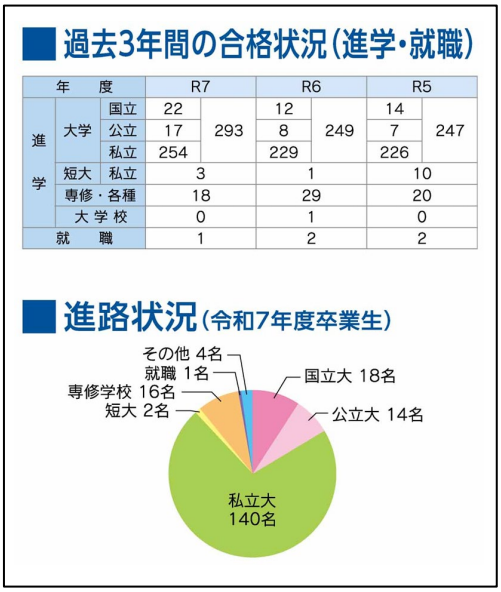


あやめ塚

Ⅱ　学校概要

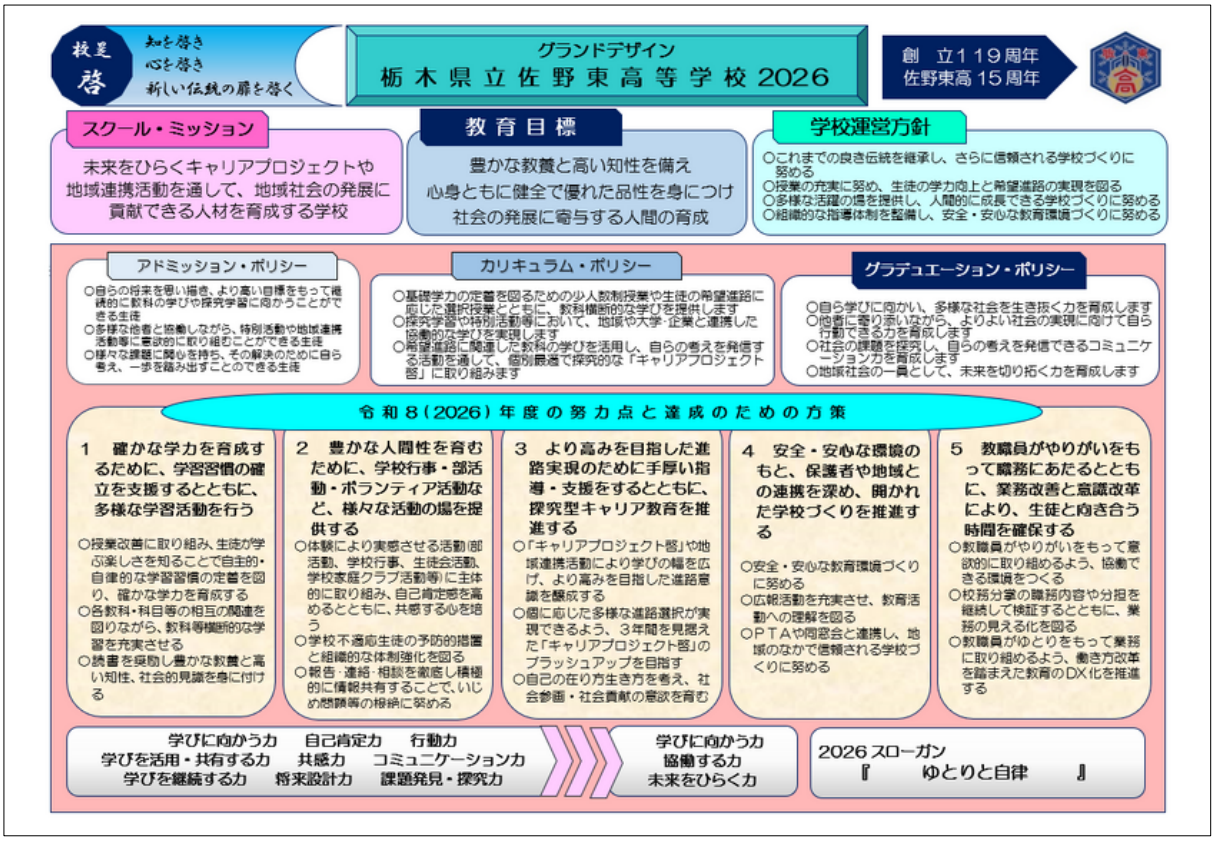
スクールミッションは「未来をひらくキャリアプロジェクトや地域活動を通して、地域社会の発展に貢献できる人材を育成する学校」、教育目標は「豊かな教養と高い知性を備え　心身ともに健全で優れた品性を身に付け　社会の発展に寄与する人間の育成」です。本校に入学してくる生徒の多くは大学進学希望ですが、短期大学・専門学校への進学や公務員等への就職を希望している生徒もいます。多様な進路希望の実現に向けた教育課程の編成により、種々な教育活動を実践しています。

また、地域との連携が強く、地元企業や自治体と協働した学習活動、地域ボランティアへの参加など、社会とつながる教育を積極的に展開しています。学校行事では、生徒主体の文化祭や体育祭、体系化されたキャリア教育プログラムが充実しており、学びと体験を結びつける機会が多いことも特色です。



本校の進路状況

部活動も活発で、運動部・文化部ともに県大会で活躍する部が複数あり、学業との両立を支える体制が整っています。教職員間の連携も密で、校務分掌が明確に整理されているため、組織としての安定感が高い学校です。



本校のグランドデザイン

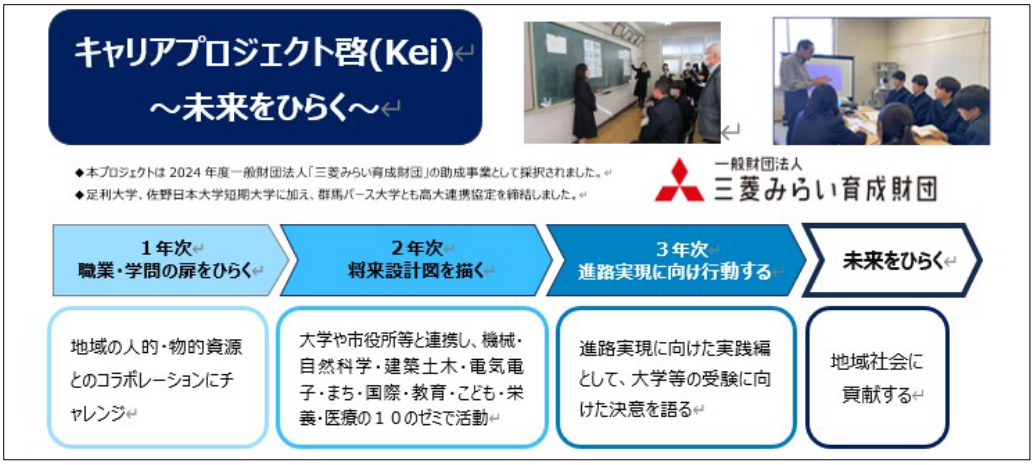
近年では、新しい学力観を育むために、３年前からブラッシュアッププロジェクトを立ち上げ、主幹教諭を中心とした教職員全員で推進しています。生徒の視野を広げる教育活動を深化させ、生徒に身に付けさせたい３つの力を育成するためのプロジェクトの内容は、次の２つです。

①総合的な探究の時間を柱とした一連の活動「キャリアプロジェクト啓（Kei プロジェクト）」

②既存の特別活動の深化や校外活動を中心とした体験により実感できる特別活動の拡充

キャリアプロジェクト啓は、一般財団法人　三菱みらい育成財団の助成事業として 2024 年度に採択され、現在に至ります。活動の詳細については、本校ホームページで公開していますので、ぜひご覧ください。

https://www.tochigi-edu.ed.jp/sanohigashi/nc3/



キャリアプロジェクト啓の概要

本校 HP
QR コード

Ⅲ　家庭科教育

１　家庭科教育の位置付け

本校の家庭科教育は、普通科高校における共通教科としての基礎的な生活教育と、３年次選択科目における専門的・発展的な学びを結び付け、生徒が自立した生活者として社会に参画する力を育てることを目的としています。１年次の「家庭基礎」では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、家庭や地域の生活を主体的に創造する資質・能力の育成を目指しています。学習内容は、人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活・環境など幅広い領域にわたり、生徒が高校生活の早い段階で自分の生活を見つめ直す機会となっています。

高等学校家庭科は、単なる家事技能の習得にとどまらず、生涯を見通して生活課題を発見し、解決策を構想し、実践を評価・改善する力を育成する教科です。学習指導要領においても、生活を主体的に営むための知識・技能、課題を解決する思考力・判断力・表現力、地域社会に参画しようとする実践的態度の育成が重視されています。本校では、この考え方を踏まえ、「家庭基礎」を全員履修の基盤とし、３年次には「フードデザイン」「保育基礎」「服飾手芸」を選択科目として設定することで、生徒の興味・関心や進路希望に応じた深い学びへと発展させています。

２　１年次「家庭基礎」における生活者育成

１年次に履修する「家庭基礎」は２単位で、すべての生徒が家庭科の基礎を学ぶ中核科目です。使用教材は「Survive!!高等学校家庭基礎【改訂版】（教育図書）」及びワークノートに加え、「家庭科 55 デジタル（教育図書）」「わくわくクッキング（教育図書）」等であり、教科書・ワーク・デジタル教材・実習教材を組み合わせながら、知識理解と体験的な学びを往還させる構成となっています。科目目標では、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することが掲げられていて、普通科の生徒にとって、将来の生活設計や社会参加を考える重要な学習機会となっています。



家庭基礎(1)

学習計画を見ると、１学期は消費生活・環境と衣生活、食生活、ホームプロジェクトを中心に構成されています。特に消費生活・環境では、18 歳で成年となることを踏まえ、契約や消費者の権利、家計と将来の経済計画、持続可能な社会の実現に必要な知識や心構えを学びます。成年年齢の引下げにより、高校生の段階で契約や消費者被害について現実的に考える必要性が高まっており、本校の家庭基礎は、生徒が自立した消費者として適切に判断し行動する力を身に付ける実践的な学びとなっています。

衣生活では、人間の生活と衣服の関わりや衣服の機能、衣服計画、素材、構成、手入れなどを学び、衣服を健康・快適・安全の観点から捉える力を育てています。食生活では、食事と健康、栄養素の働き、マナーや食文化、献立作成や調理に関する基本事項を扱い、生徒自身や家族の食生活を見直す契機としています。単元ごとに知識を得るだけでなく、自分の生活と関連付けて問題を見い出し、課題解決に向けて考えることが重視されている点が特色です。



家庭基礎(2)

２学期には、ホームプロジェクトの発表に加えて、食生活の発展、住生活、子どもの保育、高齢期の生活、共生社会を学びます。ホームプロジェクトでは、自分の家庭生活について課題を設定し、その解決に向けて主体的に工夫・改善します。発表を通して他者の学びを吸

収する活動も位置付けられており、個人の生活課題を社会的な学びへ広げる仕組みとなっています。住生活では住まいの機能や安全、地域との関わりを学び、子どもの保育では子どもの心身の発達、生活、親の役割、子どもを取り巻く環境を考えます。高齢期の生活では、高齢者の心身の特徴や社会制度、地域社会の役割を学び、共生社会では自助・共助・公助の重要性を理解します。

３学期には、共生社会の学習をまとめ、青年期・家族・生活設計へとつなげます。ライフステージの特徴と課題、現代社会の変化、家族を取り巻く課題を学び、生徒は自分の生き方、家族の在り方、これからの家庭生活を自分事として考えます。１年間の学習は、消費や衣・食・住、保育、高齢者福祉、共生社会、生活設計へと展開し、高校生が近い将来直面する生活課題を総合的に捉える内容になっています。評価方法は、定期テスト、作品、ワークシート、パフォーマンス課題、学びの記録、行動観察など多面的であり、知識だけでなく、思考・判断・表現する力、主体的に学習に取り組む態度を総合的に評価しています。

３　３年次選択科目による専門的・発展的な学び

本校の家庭科教育の大きな特色は、３年次の私立文系コースの選択科目として「フードデザイン」「保育基礎」「服飾手芸」を開設している点です。普通科高校でありながら、食育や保育、服飾文化に関わる専門的な学びを選択できることは、生徒の進路選択や自己理解を深めるうえで重要です。３科目はいずれも、実践的・体験的な学習活動を重視し、職業人として必要な基礎的資質・能力の育成を目指しています。これは、進学先での学びや将来の職業生活だけでなく、家庭や地域社会で主体的に生活を創造する力にもつながるものです。

（１）フードデザイン

「フードデザイン」は３年次の私立文系コースで選択する２単位科目で、栄養や食品、献立、調理、テーブルコーディネートなどについて体系的・系統的に学ぶ科目です。使用教科書は「フードデザイン（実教出版）」、副教材は「わくわくクッキング（教育図書）」です。科目の目標は、食生活の現状から課題を発見し、食生活の充実向上を担う職業人として合理的かつ創造的に解決する力を養うこと、さらに食生活の総合的なデザインと食育の推進に主体的・協働的に取り組む態度を育てることです。



フードデザイン

１学期は、食事の意義と役割や食を取り巻く現状、栄養素の働き、調理の基本、献立作成を中心に学びます。食事の精神的・文化的役割を理解し、現代の食生活の問題点や食品の安全性、環境の変化について考える構成です。また、栄養素の特徴や消化・吸収、アミノ酸スコア、１日に必要なエネルギー量など、科学的な理解も重視されています。調理実習は随時実施され、基礎的な調理題材を計画し、調理技術を段階的に身に付けます。

２学期は、ライフステージと栄養、食事摂取基準、食品の特徴・表示・安全、調理操作、フードデザイン実習へと発展します。特に、乳幼児期から高齢期までの栄養の特徴を理解し、各ライフステージに応じた望ましい食生活を判断する内容は、１年次の家庭基礎で学んだ生活設計や福祉の視点ともつながっています。さらに、災害時の食事について、自分や周囲の人の健康に配慮しながら非常時を想定した食事計画を立て、実践する学習が位置付けられている点は、地域社会に生きる生活者としての実践力を育てるうえで意義深いものです。

３学期には、食品衛生と安全、料理様式とテーブルコーディネート、食育の意義と推進活動を扱います。和風・洋風・中国風のテーブルコーディネート、食卓作法、供応に伴うマナーなどを学ぶことで、食を単なる栄養摂取ではなく、文化や交流、もてなし、生活の質の向上として捉える力を育てています。評価は、定期テストやワークシート、パフォーマンス課題、行動観察、調理実習の記録等により行い、知識・技能と思考・判断・表現、主体的態度の三観点をバランスよく見取っています。

（２）保育基礎



保育基礎

「保育基礎」は３年次の私立文系コースで選択する３単位科目で、保育を担う職業人として必要な基礎的資質･能力の育成を目指す科目です。使用教科書は「保育基礎　ようこそ、ともに育ち合う保育の世界へ（教育図書）」です。科目目標では、保育の意義や方法、子どもの発達や生活の特徴、子どもの福祉と文化などを体系的かつ系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けることが掲げられています。また、子どもを取り巻く課題を発見し、保育を担う職業人の視点から合理的かつ創造的に解決する力、子どもの健やかな発達を目指して主体的・協働的に取り組む態度の育成が重視されています。

１学期は、保育の意義や保育の環境、保育の方法、子どもの発達、子どもの生活、子どもの健康と生活、子どもの食事を学びます。保育には子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な意義があることを理解し、保育者のあるべき姿を考えます。家庭、幼稚園、保育所、認定こども園など、それぞれの養育・保育環境の特徴や役割を理解する点も重要です。さらに、保育技術検定種目に関する実技実習が随時行われ、知識だけでなく、保育者に必要な実践的技能を身に付ける構成となっています。

同科目の大きな特色は、１学期にインターンシップの事前指導と実習が位置付けられていることです。生徒は実際に子どもたちとふれあい、指導者の仕事の実態を観察することにより、保育の方法や発達、健康、安全、遊びについて体験的に理解を深めます。２学期にはインターンシップの事後指導とまとめを行い、体験を通して得た学びを言語化し、互いに発表し合うことで理解をさらに深めます。この過程は、単なる体験で終わらせず、自己の進路決定や職業観の形成につなげる重要な学習です。

２学期以降は、子どもの衣服と寝具、子どもの健康と安全、子どもの福祉、児童観や児童福祉の理念・法規・制度を学びます。乳幼児に適した被服素材や寝具やおむつの使い方、健康状態の観察方法、子ども特有の病気や予防接種など、保育現場で必要となる具体的知識を扱います。３学期には、子どもの文化、子どもの文化を支える場、遊び、表現活動、トーンチャイムの演奏などを通して、子どもの豊かな生活を支える文化的側面を学びます。合奏による表現活動を通して、保育者としての適切な関わり方を体験的に理解する点も特色です。

（３）服飾手芸



服飾手芸

「服飾手芸」は３年次私文選択の２単位科目で、創造的な手芸品の製作と服飾への活用を担う職業人として必要な資質・能力を育成する科目です。使用教材は「初心者にいちばんわかりやすい!!基本のかぎ針編み（ブティック社）」であり、手芸の種類と特徴、変遷、各種技法を学びながら、実際の作品製作へとつなげます。家庭科の中でも特に「ものづくり」を通して学ぶ性格が強く、手を動かしながら計画性や粘り強さ、創造性、美的感覚を育成できる科目です。

１学期は、手芸の種類と特徴、手芸の変遷を学んだ後、編み物を中心に学習します。刺しゅう、編み物、染色、織物、その他の手芸について技法や特徴を理解し、手芸がどのように変遷し現在の生活に活用されているかを学びます。編み物では、かぎ針編みと棒針編みの基本的技法を習得し、材料や用具、デザイン、基本的な編み方、仕上げについて理解します。２学期には習得した技法を用いて服飾小物を製作し、さらに学んだ技法を生かして美的価値の高い作品づくりへ発展させます。３学期には作品を完成させ、発表します。

服飾手芸の評価では、作品や小テスト、行動観察、ワークシートを用います。作品評価では完成度だけでなく、製作工程への取組、課題発見と工夫、技法の習得、表現の独自性などを見取ることができます。生徒は製作を通して、計画を立て、材料を選び、手順を理解し、失敗を修正しながら完成へ向かいます。この過程は、生活の中の課題を見つけ、よりよいものを創造する家庭科教育の本質と深く結び付いています。

４　学校家庭クラブ活動との連動

本校の家庭科教育を考えるうえで、学校家庭クラブ活動は欠かせません。家庭クラブは、家庭科で学んだ知識と技術を生かして、家庭や地域の充実向上を目指す実践活動です。活動の四つの柱として「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」が掲げられており、研究的活動、奉仕的活動、社会的活動を通して、生徒が学びを地域や社会に還元する場となっています。家庭基礎の導入部にも「家庭クラブとは何か」が位置付けられており、教科の学びと特別活動的な実践が連続するように構成されています。



家庭クラブの活動の流れ

家庭クラブの活動は、役員会、代議員会、準備、実施、反省という流れで進められています。生徒が企画を共有し、参加者を募り、準備や製作を行い、当日は役員を中心に活動し、終了後には反省を次の活動へ生かします。この一連の流れは、課題設定、計画、実践、評価・改善という探究的な学習過程そのものであり、家庭科の授業で重視される問題解決的な学びを学校生活全体へ広げる役割を果たしています。

主な活動には、料理講習会や花いっぱい運動、老人会「愛宕会」との交流、クリーン作戦、保育園訪問、県家庭クラブ総会・リーダー養成講習会、落葉掃き、歳末助け合い募金、県連家庭クラブ研究発表大会、盲学校訪問などがあります。また、通年で使い捨てコンタクトレンズ空ケース回収やエコキャップ回収にも取り組んでいます。これらの活動は、家庭科で学ぶ食、保育、高齢者、環境、福祉、地域交流の内容と密接に関係しており、授業で得た知識や技能を実社会の中で生かす機会となっています。





家庭クラブ活動
（ 花いっぱい運動、クリーン作戦、料理講習会、老人会との交流 ）

たとえば、料理講習会はフードデザインや食生活領域の学びと結び付き、調理技能だけでなく、交流や協働の力を育てます。保育園訪問は保育基礎や家庭基礎の子どもの保育領域と関わり、幼児とのふれあいを通して、子どもの発達や大人の関わり方を体験的に理解する場となります。老人会「愛宕会」との交流や落葉掃き、歳末助け合い募金は、高齢者理解や地域福祉、共生社会の学習と重なり、地域の人々と関わる中で思いやりや奉仕の態度を育みます。クリーン作戦やリサイクル活動は、消費生活・環境や持続可能な社会の学習を具体的な行動へつなげる活動です。

５　評価と指導の特色

本校家庭科の評価は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点を共通の枠組みとしています。観点別評価はＡ、Ｂ、Ｃの３段階で行い、最終的な評定は観点別評価を総合して５段階で示します。「家庭基礎」、「フードデザイン」、「保育基礎」、「服飾手芸」のいずれにおいても、この三観点が明確に設定されており、定期テストだけでなく、作品、ワークシート、パフォーマンス、課題、実習記録、行動観察、実技評価など、多様な方法で学習状況を捉えています。

この評価方法の特色は、知識の理解だけでなく、生徒が実際に考え、判断し、表現し、行動する姿を重視している点です。調理実習では、衛生・安全への配慮、手順の理解、班での協働、実習後の記録や振り返りを評価の対象とします。保育実習やインターンシップでは、子どもへの関わり方、観察の視点、体験を言語化する力が問われます。服飾手芸では、作品の完成度だけでなく、製作過程における課題解決や創意工夫を重視します。家庭基礎では、学びの記録やホームプロジェクトを通して、自分の生活課題を見つめ、改善へ向けて実践する姿勢を評価しています。

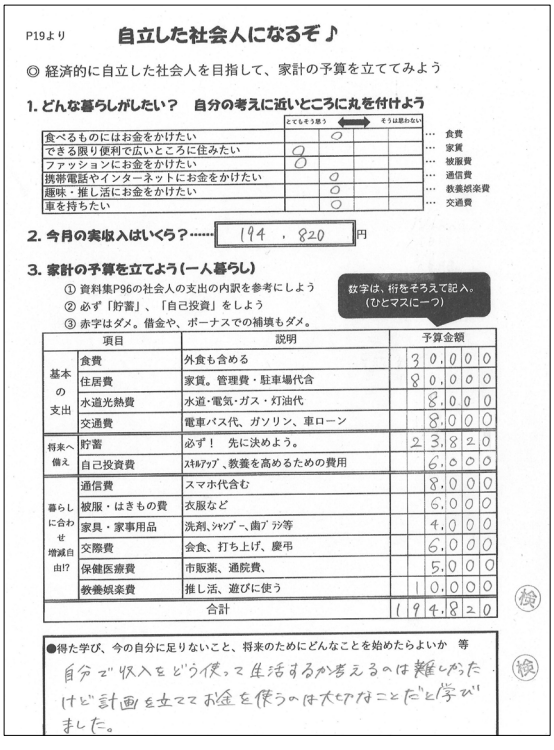
また、各科目に共通して、実践的・体験的な学習活動を重視しています。家庭科の学びは、授業内の知識習得で完結するものではなく、家庭、学校、地域社会の中で活用されて初めて意味をもちます。

本校では、調理や製作、実習、発表、交流、ボランティアなどを通して、生徒が学んだことを自分の生活に引き寄せ、他者と協働しながら実践する機会を豊富に設けています。この点は、本校が推進するキャリア教育や地域活動とも方向性を同じくしており、家庭科教育が学校全体の教育目標の実現に寄与していることを示しています。

６　普通科高校における家庭科教育の意義

普通科高校における家庭科教育は、進学指導と対立するものではなく、むしろ生徒が将来どのような分野に進んでも必要となる基礎的な社会性や生活力、課題解決力を育てる教科です。

人生のあらゆるライフステージにおいて、消費者として、生活者として、家族や地域の一員として意思決定を行う場面に直面します。本校の生徒は大学進学を希望する者が多いことからこそ、どのような法律や制度、行政による支援、社会の仕組み、流通サービスがあったら人々の暮らしや自分自身の人生がより良くなるのかを見出し、将来それぞれが選んだ進路において実現するために、常に自分事として捉えて考える力を身に付けることを期待しています。家庭科は、そうした現実の生活場面に根ざした学びを提供し、生徒が自分の生活を主体的に設計する力を着実に育てています。


P19より　自立した社会人になるぞ♪

◎ 経済的に自立した社会人を目指して、家計の予算を立ててみよう

1. どんな暮らしがしたい？　自分の考えに近いところに丸を付けよう

	とてもそう思う				そうは思わない	
食べるものにはお金をかけたい		○				… 食費
できる限り便利で広いところに住みたい	○					… 家賃
ファッションにお金をかけたい	○					… 被服費
携帯電話やインターネットにお金をかけたい		○				… 通信費
趣味・推し活にお金をかけたい		○				… 教養娯楽費
車を持ちたい		○				… 交通費

2. 今月の実収入はいくら？…… 194，820 円

3. 家計の予算を立てよう（一人暮らし）

① 資料集P96の社会人の支出の内訳を参考にしよう
② 必ず「貯蓄」、「自己投資」をしよう
③ 赤字はダメ。借金や、ボーナスでの補填もダメ。

数字は、桁をそろえて記入。（ひとマスに一つ）

	項目	説明	予算金額
基本の支出	食費	外食も含める	30,000
	住居費	家賃。管理費・駐車場代含	80,000
	水道光熱費	水道・電気・ガス・灯油代	8,000
	交通費	電車バス代、ガソリン、車ローン	8,000
将来へ備え	貯蓄	必ず！　先に決めよう。	23,820
	自己投資費	ｽｷﾙｱｯﾌﾟ、教養を高めるための費用	6,000
暮らしに合わせ増減自由!?	通信費	スマホ代含む	8,000
	被服・はきもの費	衣服など	6,000
	家具・家事用品	洗剤、ｼｬﾝﾌﾟｰ、歯ﾌﾞﾗｼ等	4,000
	交際費	会食、打ち上げ、慶弔	6,000
	保健医療費	市販薬、通院費、	5,000
	教養娯楽費	推し活、遊びに使う	10,000
合計			194,820

●得た学び、今の自分に足りないこと、将来のためにどんなことを始めたらよいか　等

自分で収入をどう使って生活するか考えるのは難しかったけど計画を立ててお金を使うのは大切なことだと学びました。

検

検

主体的な活動を支援する生徒ワークシート

特に本校では、１年次の家庭基礎で全員が生活の基礎を学び、３年次の選択科目で興味・関心に応じた専門的な学びへ進むカリキュラムを整えています。これは、基礎から発展へ、生活者としての学びから職業人としての視点へ、個人の生活課題から地域社会の課題へと学びを広げる教育課程です。フードデザインは食育や災害時の食事計画を通して健康と地域生活を考え、保育基礎は子どもの発達や福祉を通して次世代育成を考え、服飾手芸は生活文化とものづくりを通して創造性を育てます。これらはすべて、普通科の幅広い学びに実践性と生活実感を加える役割を果たしています。

さらに、家庭科教育は地域型進学校としての本校の特色とも合致しています。地域社会の発展に貢献できる人材を育成するには、地域の人々と関わり、生活課題を具体的に捉え、解決に向けて行動す

る力が必要です。家庭クラブ活動や保育園訪問、高齢者との交流、清掃活動、募金活動、リサイクル活動は、生徒が地域の中で学びを実践する機会であり、家庭科教育が学校のスクールミッションと結び付いていることを示しています。加えて、現代社会では、性の多様性、パートナーとの暮らし方の変化、結婚や子育てに対する価値観の多様化、少子高齢化、単身世帯の増加、介護や福祉をめぐる課題など、生活を取り巻く状況が大きく変化しています。これらは決して社会全体の抽象的な問題ではなく、生徒自身の将来の人生設計に関わる問題であり、家族や友人、将来のパートナー、子ども、高齢の親族など、自分にとって大切な人の暮らしを支える場面にもつながる身近な課題です。家庭科の学びは、そうした現代の課題を単に知識として理解するだけでなく、自分事として受け止め、相手の立場や多様な生き方を尊重しながら、よりよい生活のあり方を考える力を育てています。つまり、高校で家庭科を学ぶことは、自分一人の生活を整えるためだけでなく、多様な背景をもつ人々と共に生き、必要な情報を選び取り、制度や地域資源を活用しながら、大切な人の人生や暮らしを支えることのできる生活者になるための学びです。本校の生徒には、家庭科で身に付けた知識や技能、思考力、実践力を、将来の進学先や職業生活、家庭生活、地域活動の中で生かし、誰もが自分らしく安心して暮らせる社会づくりに主体的に関わる人へと成長してほしいと考えて、授業担当者は日々の授業を実践しています。

Ⅳ　まとめ

これからの社会は、少子高齢化の進行や家族形態や価値観の多様化、性の多様性への理解、地域コミュニティの変化、消費生活の複雑化、環境問題、災害への備え、デジタル化の進展などにより、これまで以上に予測が困難で、多様な課題が重なり合う時代になると考えられます。そのような社会に向かう高校生に求められるのは、単に知識を身に付けることにとどまらず、学んだことを自分の生活と結び付け、自分と大切な人、そして地域社会のよりよい暮らしのために活用しようとする姿勢です。自分の将来を主体的に設計する力、異なる考え方や生き方を尊重する態度、困っている人に気付き支え合う感性、必要な情報を選び取り、制度や地域資源を活用する判断力は、これからの時代を生きるうえで欠かすことのできない力です。家庭科教育は、まさにこうした力を育てる教科であり、食生活や、衣生活、住生活、消費生活、保育、高齢者福祉、共生社会、生活設計などの学びを通して、生徒が生活を総合的に捉え、よりよい生き方を考える基盤をつくっています。

今後の家庭科教育には、生活に関する知識や技能の習得に加え、ウェルビーイングの視点を一層重視することが求められます。ウェルビーイングとは、単に健康であることや経済的に安定していることだけでなく、一人ひとりが自分らしく生き、他者とつながり、安心して暮らし、社会の中で役割や生きがいを見いだしていく状態を意味します。高校生が家庭科で学ぶ内容は、自分自身の心身の健康を守ること、家族やパートナーと協力して暮らすこと、子どもや高齢者を支えること、地域の人々と共に生きること、持続可能な社会をつくることへと広がっています。



生徒と社会をつなぐウェルビーイング

したがって、本校の家庭科教育は、普通科高校における教科教育であると同時に、地域に根ざしたキャリア教育であり、生徒自身と社会全体のウェルビーイングを結び付ける教育活動であるといえます。今後も、授業、実習、探究活動、家庭クラブ活動、地域連携、キャリアプロジェクト啓を一層有機的に結び付け、生徒が生活課題を自分事として捉え、他者と協働しながら解決に向かう学びを充実させていきたいと考えています。そして、生徒一人ひとりが、進学先や職業生活、家庭生活、地域活動のあらゆる場面で、家庭科で培った知識、技能、思考力、実践力を生かし、誰もが自分らしく安心して暮らせる社会の担い手として成長していくことを期待しています。

地域と共に歩む ～琴平高校の今とこれからの課題～

香川県立琴平高等学校長　　村　上　盛　彦

Ⅰ　はじめに



香川県立琴平高等学校は香川県の中讃地区に位置し、全国的にも有名なこんぴらさん（金刀比羅宮）のお膝元として栄えている琴平町にあります。

来年創立 90 周年を迎える本校は、地域の方々の熱い思いに支えられながら地域とともに歩んでいる学校です。「地域社会の中核として活躍するたくましい人材の育成～地域で学び、地域で育つ琴高生～」を掲げ、地域との関係を密に保ちながら教育活動を行っています。

全校生徒 493 名（男子 227 名、女子 266 名）普通科のみの高校ですが、進路にあわせて４つのコース〈特進、人文、理数、ビジネス〉に分かれ、それぞれのコースの特徴を活かした授業を実践しています。卒業後は、おおよそ４割の生徒が大学・短期大学へ、３割の生徒が専門学校へ進学し、３割の生徒が地元企業に就職しています。

Ⅱ　学校概要

１　校訓

「誠意・熱意・創意」

２　教育方針

心身を鍛え、生涯にわたって学び続ける意欲を養い、地域社会の一員としての自覚と国際的視野を育み、社会の変化に主体的に対応できる心豊かでたくましい人間の育成を目指し、次のような教育方針のもと、家庭や地域との連携を図りつつ、明るく活力に満ちた学校づくりを推進する。

（１）人間や自然を愛する心を養い、心ゆたかな誠意ある人間の育成に努める。

（２）自主、自立の精神を養い、心身ともにたくましい熱意あふれる人間の育成に努める。

（３）広く高い知性を養い、郷土を愛し社会の発展に貢献する創意に満ちた人間の育成に努める。

３　特徴

（１）カリキュラムポリシー

①　「着実な学び」（1 年次）：習熟度別や少人数の授業等で、基礎学力の確かな定着と向上を図ります。

②　「可能性に挑戦」（２年次）：コース制をとり、進路希望や適性に応じてより専門的な学習に取り組みます。

③　「夢の実現」（３年次）：個別指導や課外授業にも取り組み、一人ひとり、自らの進路を切り拓きます。

（２）特徴的な授業や取組

①　進路希望と適性に応じたコース制、興味・関心で選べる自由選択科目、目標実現を支援する個別指導。

②　「 琴平道 」（総合的な探究の時間）：地域の抱える諸問題の解決に向け協働的な探究活動。

③　地域とのつながり：こども園との交流、企業での課題研究、ボランティアへの参加。

（３）特色ある学校行事

①　琴高ウィーク：異種武道大会（剣道 VS. なぎなた）、
　文化部等公演会、公開授業

②　クリーンアップ大作戦（町内の清掃活動）

③　琴高展（文化部等の校外展示・発表会）



（４）活躍が顕著な部活動

① 運動部: なぎなた、剣道(全国大会優勝・入賞多数)

② 文化部: 郷土芸能同好会、とらすとＫ(神戸震災被災者等に手紙を送る会)

４　教育課程

１年次は全員が必履修教科・科目を履修します。２年次からは各自の進路に合った４つのコースに分かれます。特進文系・特進理系コースは国公立大学、難関私立大学を目指した授業を行っており、また課外・課題テスト・校外模試を通して、実力をつけていきます。人文コースは国語や英語、地歴公民の科目を中心に学習し、大学、短大、専門学校への進学を目指します。２・３年次に自由選択科目があり、芸術系やスポーツ系の進路にも対応しています。ビジネスコースは商業・情報系の科目を中心に学習し、ビジネス系の検定の取得にも力を入れています。就職を目指す人が多いなか、大学や専門学校に進学する人もいます。理数コースは理科・数学・英語に重点をおいて、工学系や理学系、医療分野への進学を目指します。３年次には人文コースに保育・福祉系が加わり、さらに進路を意識した学習に取り組むことができます。

また、普通科高校でありながら選択科目で家庭科の科目が充実しているのも特徴といえます。

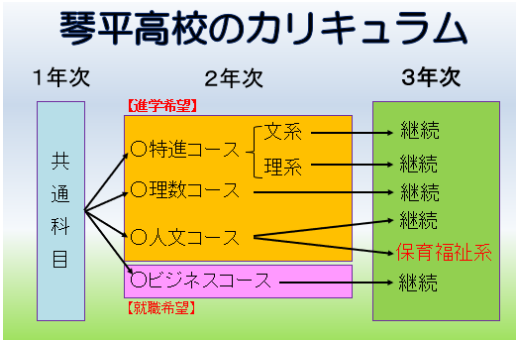
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1年	共通	現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ			数学A		科学と人間生活		英語コミュニケーションⅠ			論理・表現Ⅰ		体育			保	芸術Ⅰ		家庭基礎		情報Ⅰ		平早進	LHR
2年	特進文	論理国語		古典探究		地理総合		日本史探究 世界史探究		公共	数学Ⅱ			数学B		化学基礎		生物基礎		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			保	平早進	LHR		
	特進理	論理国語		古典探究		地理総合		公共		数Ⅱ		数B		化学基礎			物理基礎 生物基礎			英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			保	平早進	LHR		
	人文	論理国語		文学国語		古典探究		地理総合		日本史探究 世界史探究	公共		数学Ⅱ			化学基礎		英語コミュニケーションⅡ			論理・表現Ⅱ		A群		体育		保	平早進	LHR		
	ビジネス	論理国語		地理総合		公共		数学Ⅱ			化学基礎		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		ビジネス基礎		情報処理			簿記		体育			保	平早進	LHR		
	理数	論理国語		文学国語		地理総合		公共		数学Ⅱ			数学B		化学基礎			物理基礎 生物基礎		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			保	平早進	LHR		
3年	特進文	論理国語		文学国語		古典探究		日本史探究 世界史探究		政治・経済	数学C			数学探究Ⅲ			化学基礎		生物基礎	英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			平早進	LHR			
	特進理	論理国語		古典探究		地理探究		数学Ⅲ 数学探究Ⅱ			数学C			化学				物理 生物			英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			平早進	LHR			
	人文	論理国語		文学国語		古典探究		生物基礎		日本史探究 世界史探究	政治・経済		数学探究Ⅰ			芸Ⅱ		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		B群		C群		体育		平早進	LHR			
	人文 保育・福祉	論理国語		文学国語		古典探究		生物基礎		日本史探究 世界史探究	政治・経済		生活と福祉			芸Ⅱ		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		B群 保育実践		C群 フード		体育		平早進	LHR			
	ビジネス	論理国語		文学国語			生物基礎	政治・経済		芸Ⅱ		英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		ソフトウェア活用			課題研究			B群		C群		体育		平早進	LHR			
	理数	論理国語		文学国語		地理探究		数学Ⅲ 数学探究Ⅱ			数学C			化学				物理 生物			英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		体育			平早進	LHR			

２年 Ａ群	３年 Ｂ群	３年 Ｃ群	３年 保育・福祉系選択者
数学Ｂ 選択スポーツⅠ 芸術Ⅰ（音・美・書） グローバルイングリッシュ ビジネス基礎 保育基礎	倫理 物理基礎 選択スポーツⅡ 実践英語 生活科学 原価計算 保育実践	数学Ｃ 芸術Ⅰ（音・美・書） 英語研究 情報処理 服飾手芸 原価計算 フードデザイン	生活と福祉

※３年次に保育・福祉系を選択する者は、２年次のＡ群で「保育基礎」を選択する
※Ｃ群の「数学Ｃ」は、Ａ群の「数学Ｂ」を履修した後に履修できる

Ⅲ　本校における家庭科教育

１年次に「家庭基礎」（２単位）を履修、人文コースでは２年次に自由選択科目である「保育基礎」、３年次には「保育実践」「フードデザイン」「生活と福祉」「服飾手芸」と、学校設定科目である「生活科学」を選択することができます。２年次に保育基礎を選択した生徒のみが保育・福祉系の科目（「保育実践」「フードデザイン」「生活と福祉」）を選択できます。この保育・福祉系は将来、保育士や社会福祉士、調理師を目指す生徒を主に対象としています。また、「生活科学」「服飾手芸」は人文コースとビジネスコースの



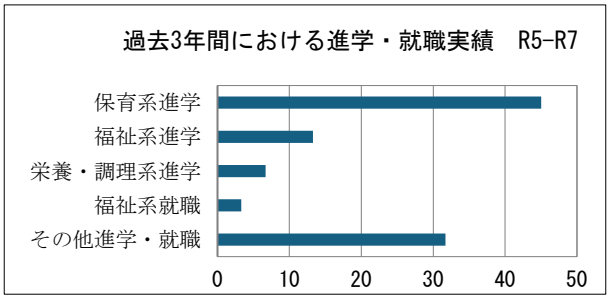
３年生のみ選択できます。

普通科高校で保育や福祉に関する専門的な科目を学ぶことができる高校は、香川県では少なく、中学生が本校を進路先に決定する際の決め手となることも少なくありません。特に、「保育実践」及び「生活と福祉」を開講している県内の公立普通科高校は本校のみであり、保育や福祉に関する専門的な学びを充実させていることが本校の強みとなっています。外部講師の講義や実習、こども園や介護施設、特別支援学校への訪問など地域や外部とのかかわりを大切にして、幅広い視野や知識を育むことができるカリキュラムを編成しています。

Ⅳ　保育・福祉系の進路状況

保育・福祉系を選択した生徒の多くは、保育系の学校へ進学します。介護福祉士や社会福祉士を目指す生徒は、専門学校の介護福祉学科への進学または介護福祉施設への就職などさまざまです。

また、県内の学校に進学する生徒が多く、将来は香川県の保育業界や地域の福祉業界を担っていく人材を育成しています。



Ⅴ　保育・福祉系の教育内容

将来、保育士や社会福祉士、調理師を目指す生徒が選択しており、授業でそれぞれのスペシャリストを社会人講師として招き、より深く学習する機会を設けています。また、地域との連携として校外での研修や実習を行うなど、保育や福祉という科目の垣根を越えて豊富な知識を身に付け、地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

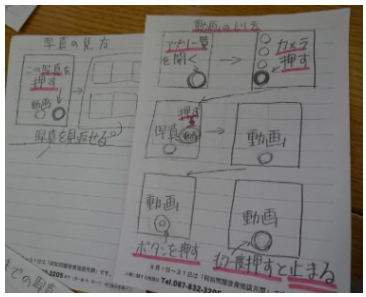
１　福祉分野の活動

主に３年生で学習しますが、そもそも福祉とは何かというところから考察します。「福祉って何?」と質問すると、「高齢者？」「老人福祉施設？」という答えが大半を占めます。福祉には介護福祉分野、高齢者福祉分野だけではなく、障がい者福祉分野、児童家庭福祉分野などが含まれ、すべての人が安心して幸せに暮らせる社会を実現するための制度や支援の総称であるということを再確認したうえで授業に入ります。社会人講師を招き、教科書には載っていない実践的な知識や技術を学び、福祉職が将来の職業の選択肢の１つになることも考えながら取り組んでいます。

（１）スマホサロン









毎年、7月と10月に琴平町在住の高齢者対象に、生徒が先生役としてスマートフォンの基本的な使い方、写真の撮り方、会員登録の仕方など、日々の疑問について相談できる地域密着型のイベント「スマホサロン」を開催します。琴平町の人口は約 8,000 人。そのうち老齢人口比率は42.5%（令和６年10月現在）と香川県で４番目に高齢者率の高い町です。生徒たちが地域貢献できることは何かを考えたとき、生徒たちが得意なスマートフォンを活用することで地域の高齢者と交流を深めることができるのではないかと考え、開催しています。スマホサロンに参加した高齢者の方から「若い人と話せて良かった」「使い方を知ることができたので、生活に張りが出る」などの感想をいただきました。「キャッシュレス決済を使ってみたい」という要望に対して、サロンで説明し、終了後コンビニエンスストアで実践された方もいます。生徒たちが町づくりの一端を担うことで、達成感を得られ、実践的なスキルアップにつながったといえます。

（２）レクリエーション講習





11 月に行われる高齢者施設訪問前にレクリエーション技術を４時間かけて協会の方から学びます。高齢者施設訪問ではグループに分かれてレクリエーションを行います。また、こども園訪問でもこのレクリエーション技術が役立ちます。手遊び・指遊びなど巧緻性を高める遊びから、体操やゲームなど身体を使う遊びを学んだ後、各グループで自分たちが考えた遊びを施設訪問時に高齢者の方と一緒に楽しみました。単に楽しむだけではなく、この遊びは何を目的としているのか、安全に楽しく参加できるにはどうすればよいかなどを考えたうえでレクリエーションの内容を考えました。

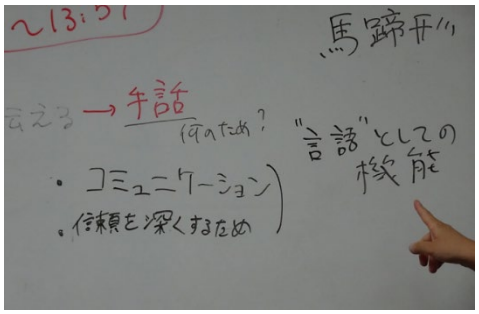
施設側の配慮で認知機能に問題がない方との交流となりましたが、生徒から「認知症の方にはどのように接したらよいか」「認知症の方向けのレクリエーションは？」などの質問もあり、いろいろな場面を頭の中で巡らせながら実習に臨もうとしていることが感じ取れました。

（３）聴覚支援学校との交流





毎年 12 月に学校行事の一環として文化部等公演会（文化部の日ごろの活動の成果を発表する場）が開催します。保育・福祉系では手話コーラスを披露します。今年は発表前に手話に触れる機会を設けたいと考え、7月に聴覚支援学校の先生方をお迎えして手話講座を開きました。実際にろう者の先生と接しコミュニケーションの難しさ、聞こえる人の文化、聞こえない人の文化の違いを強く感じました。夏休みに手話をさらに学び、10 月には聴覚支援学校を訪問し生徒と交流をします。

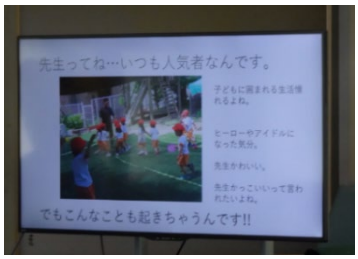


2　保育分野の活動

２年次に「保育基礎」を３年次に「保育実践」を履修させ、こども園への実習を２年間にわたり実施します。保育士を希望する生徒が多いため、県の健康福祉部子ども政策課の協力を得て、香川県における保育士不足の施策について話を聞いたり、大学の出前講座を利用して講師を招いたりと、あらゆる方面からアプローチをして、保育士を目指す生徒のための動機付けを行っています。

（１）保育士講話





保育士の待遇面ややりがいなどを保育士から実際に聞くことができました。給与・待遇、子どもたちと接するときのマナー、保護者との関係の築き方など、学校の授業だけでは学べないことを知ることができたと同時に、養護と教育が一体となって豊かな人間性をもった子どもの育成をするのが保育士の重要な役割であることも知ることができました。

（２）出前授業

香川短期大学の出前講座を利用し、保育実習に行く前に布のおもちゃづくりや絵本の読み聞かせ方などを学びました。それぞれが担当する年齢の子どもに合った遊びや声掛けの仕方などについて質問しながら、保育実習に向かう準備を行いました。実習へのモチベーションが上がると同時に、進路意識の向上にもつながると思われます。



（３）保育実習



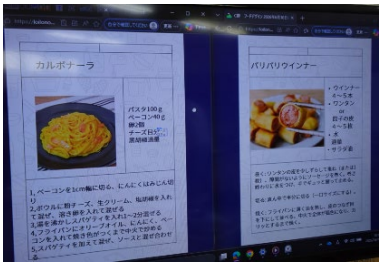


毎年 10 月に琴平町立南こども園で保育実習を行います。各自が何歳児を担当するかを決めてから実習に臨みます。今回はこども園にある遊具を用いての遊びを考え、実践しました。しかし自分たちが思うように園児は動いてくれません。考えてきたことが実践できないまま終わってしまう生徒がほとんどでしたが、先生が園児の気持ちをきちんと聞いたり、確かめながら対応したりしている姿に愛情を感じました。園児や先生から多くのことを学ばせていただいた実習でした。

3　食の分野の活動

卒業後に調理師の専門学校や製菓の専門学校へ進みたい生徒に対して、外部講師を招聘し調理の基本から応用までを学習します。

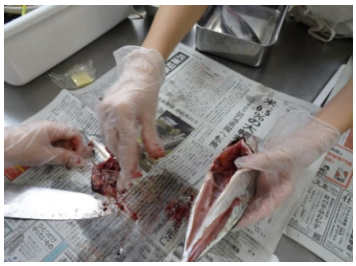
（１）生徒主体の授業






インターネットや料理本を参考にしたレシピや、各自でアレンジしたレシピを考え、調理実習のメニューとしました。１人１台の実習台で作業をしていくので友達に頼ることができずに集中して取り組むことができます。決められた統一されたレシピよりも自分たちが考えたレシピで実習を行うことで、調理の段取りを自分で組み立てる力、主体性・課題解決力、食への関心や実践意欲が高まるなどの効果が期待できます。

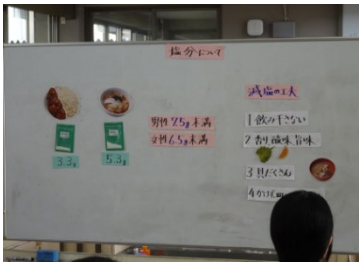
（２）苦手な魚を克服！





家庭では魚料理を食べない、苦手という生徒が多くいます。瀬戸内海で獲れる魚介類には、栄養的にみても良質なたんぱく質や不飽和脂肪酸など成長に欠かせない栄養素が多く含まれています。魚嫌いの克服第一歩としてアジのバター焼きを作りました。魚をさばいたことのある生徒はほとんどなく、悪戦苦闘をしつつも講師の先生の丁寧な指導で完成させることができました。魚のさばき方、魚のきれいな食べ方などを調理実習で経験し、これからの生活に活かしてほしいと思います。

（３）食習慣の見直し

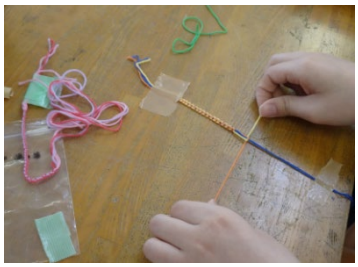





琴平町食生活改善推進協議会会員（ヘルスメイト）の方々が来校し、食習慣の改善を目的とし、塩分の摂取量や野菜の摂り方などの講義とともに生徒と一緒に調理実習を行いました。生徒たちが普段食べているもの、好きなものには塩分が多く含まれているものが多数あり、これらを摂取し続けると将来的に高血圧症などの疾患が懸念されます。また１日に摂取すべき野菜の量はどのくらいであるかなどを学習し、塩分の少ないかつ野菜を使った料理をヘルスメイトさんに指導していただき調理しました。生徒たちは今回学んだことを他人事ではなく自分事として捉え、塩分の過剰摂取がいかに体に悪影響を及ぼすのかを理解することができました。

Ⅵ　「服飾手芸」「生活科学」について

人文コース、ビジネスコースの３年生が選択できるのが「服飾手芸」と「生活科学」です。「服飾手芸」は手芸品を創造的に製作し、服飾に関する基本的な技術と態度を身につけさせます。「生活科学」は学校設定科目で、衣食住の分野の枠を取り払い、より生活に根差したテーマを設定し、生活体験に近い形で実習や実験などを取り入れています。いずれも「家庭基礎」で学んだことをベースとして発展させた内容となっています。





Ⅶ　本校家庭科教育のこれからの課題

普通科で家庭科の科目を多く履修できる学校は県内でも珍しく、また、教員数も各校１名が標準的なな か２名配置というのは大変恵まれています。また、保育・福祉系の生徒は明確な進路意識を持った生徒が多く、積極的に取り組んでいます。しかしながら、教育内容はここ数年同じようなことが行われているのが現状です。そこで、今年度は新たに福祉分野に障がい者福祉を取り入れました。福祉についての学習の幅を広げることで、それに関わる職業も見えてきます。仕事や生活の中で生かせる能力を身につけさせることを目標としています。保育分野では、心の成長と社会性を育てる役目があることをしっかりと理解させ、授業に臨ませます。こども園や保育所などの１日体験に参加するよう促すなど外部とのかかわりを多く持ち、経験値を上げることでより将来の目標に近づけます。食の分野も県の食育推進派遣事業、うまいもん出前講座などを利用し、技術だけではなく食育にも力を入れていきます。各自のレシピ作成も１品ではなく栄養のバランスを考えた２品目、３品目を立てさせたいと思います。

外部講師の授業や体験学習、地域交流など、教室での授業だけでは学び得ないことを経験させ、生徒自らが考え、実践し、振り返る、「生徒主体の授業」を実践するとともに、身体的にも、精神的にも、社会的にも健康であることを目指して成長する生徒を育てていきたいと考えています。

家庭科の授業における生成ＡＩの活用

大分県立情報科学高等学校長　　橋　本　武　晴

Ⅰ　はじめに



本校は、1988 年大分県大分市に創立し、開校以来商業科・工業科を中心とした専門教育を基盤に、社会の変化とともに教育の在り方を見直しながら歩みを重ねてきました。特に近年では、急速に進展するデジタル社会や多様化する地域・産業の課題に対応するため、従来の知識習得型の学びから、課題を発見し解決へ導く探究型学習へと大きく転換しています。また、企業との連携や先端技術の導入、デザインシンキングを基盤とした教育実践に加え、情報科の新設による学科横断型の学びを推進し、本校独自の教育スタイルを構築してきました。現在は、「デジタル×ビジネス×課題解決」を教育の柱とし、「日本の教育のファーストペンギンになろう」をスローガンに、未来社会を主体的に切り拓く人材の育成に取り組んでいます。

Ⅱ　学校概要

１　沿革

1988 年：商業科・工業科を有する学校として開校（従来型の専門教育）
2020 年：企業と連携し、先端技術（AI・3D プリンタ等）を活用した教育へ転換
　　デザインシンキングを導入し、課題解決型学習を本格化
　　コミュラボ（ものづくり・探究の拠点）を設置
　　生徒主体・探究型の学びへシフト
2023 年：情報科を新設し、学校全体を DX 型へ再編
　　2023 年度文部科学省「GIGA スクールにおける学びの充実事業」（リーディング DX スクール）【生成 AI パイロット校】に決定（10 月）
現在　：商業・工業・情報を横断したカリキュラムで、デジタル×ビジネス人材を育成

２　教育目標

生徒一人ひとりが多様な選択肢から将来のキャリアを見据え、責任感を持ち自己決定力を備え、高度情報化社会を担っていける基本的な能力や資質を身につけさせるとともに、豊かな感性とたくましく生き抜く力を兼ね備えた人財（材）を育成する。

３　スクールミッション

地域及び日本の産業界を担う情報技術者育成のフラグシップ校であり、地域や大学・企業等と連携した実践的・体験的な探究学習や起業家教育を通して、次代を担う IT リーダーとしての素養や、社会をイノベイトする力を育成する。

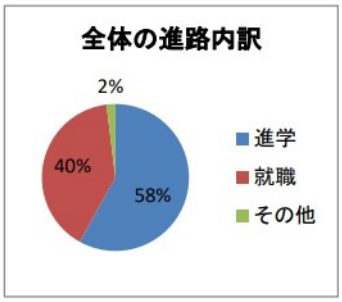
４　教育課程



５　進路状況

昨年度の卒業生 155 名のうち､就職した生徒は 62 名､進学した生徒は 90 名､その他が３名となっています。

進路項目	人数（名）
進学	90
就職	62
その他	3
合計	155



就職先は、大分県内が 55 名と全体の約 9 割を占め、多くの生徒が地域で活躍しています。また､進学した生徒は全体の約６割を占め、就職・進学の双方に対応した進路指導を行っています。

学科別では､AI テクノロジー科は就職する生徒が多く、ビジネスソリューション科は就職と進学がほぼ半数ずつ､デジタル創造科は進学する生徒が多いことが特徴です。今後も、生徒一人ひとりの希望や適性に応じた進路指導を充実させ、希望する進路の実現につながる教育を推進してまいります。

Ⅲ　生成 AI の取組

１　生成 AI 研修

本校では、2023 年度文部科学省「GIGA スクールにおける学びの充実事業（リーディング DX スクール）」の生成 AI パイロット校として指定を受け､以下のような生成 AI 活用に向けた取組を進めてきました。

日付	研修名	対象・内容	講師等
2023.5.30	AI活用講座	デジタル創造科1年対象	株式会社TNC 花井太郎氏(ChatGPT担当)、橘高和孝氏(Webサイト構築担当)、八木野靖夫氏(ICT教育担当)
2023.10.31	一(イチ)から始めよう生成AI、そして授業へ	ChatGPT活用	株式会社NEL&M 代表取締役 田中康平氏
2023.11.17	工業技術基礎におけるAI体験講座	1年対象	コーディネート：ハイパーネットワーク社会研究所 坂口萌々子氏／授業実施：株式会社Fabo 佐々木陽氏
2024.7.9	第1回「生成AIを活用した授業」の公開および講演会	授業公開・講演会	株式会社NEL&M 代表取締役 田中康平氏
2024.12.20	第2回「生成AIを活用した授業」の公開および講演会	授業公開・講演会	本校教諭　未来教育研究部主任 柴田由美子
2025.4.2	画像生成研修	本校生徒課題研究グループより	
2025.6.4	生成AIを活用した進路における業務改善研修	志望理由書の作成手法	株式会社インターンパーク 梶原友昭氏・樫山果歩氏
2025.10.3	NotebookLM活用	補助教材の作成	山口大学大学院教授 大島直樹氏
2025.10.28	外部講師招へい事業	生徒＋教員対象	合同会社Hundreds 代表 大塚あみ氏

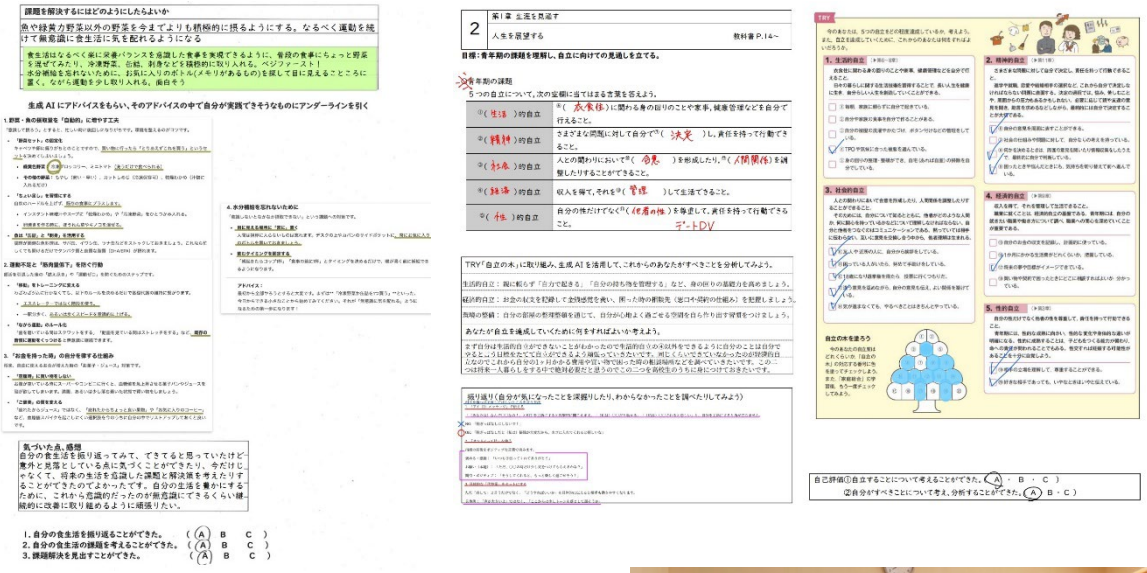
なお、生成 AI の活用に際しては、まず入学時に保護者から活用の承諾をいただいています。指導においては利便性だけでなく、適切な利用方法の徹底を重視し、2023 年の講座以降、生徒への注意喚起と、各学科・教科の授業を通じた継続的な指導を続けています。

２　家庭科での取組

（１）授業における生成 AI の活用

家庭科では、「家庭総合」の授業において、生成 AI を単元ごとに活用しています。例えば、３年生の食生活分野では、「食生活の課題」において、生徒自身の食生活を振り返り、その内容を生成 AI で分析することで、将来的なリスクや改善方法について考察します。生徒自身がまず考え、その後 AI から新たな視点やアイデアを得ることで、課題解決につなげています。

また、２年生の「生涯を見通す」分野では、自立に関する自己分析を行い、生成 AI を活用して今後取り組むべき課題を整理しています。



さらに、Gemini の画像生成機能を活用して学校のマスコットキャラクターを挿絵に使用したり、スライド作成に Ganma や NotebookLM を活用したりしています。





（２）家庭クラブ

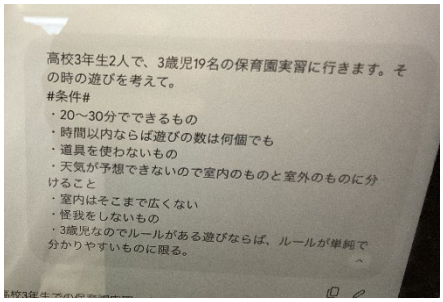
家庭クラブ活動においても、文化祭や調理講習会、キャンパスツアーなどで生成 AI を活用しています。また、2024 年度大分県高等学校家庭クラブ研究発表大会では、生成 AI を活用してテーマソングを制作しました。





（３）保育体験実習

３年生の保育分野では、近隣の保育園や幼稚園での実習に向けて、生成 AI を活用しています。園で行う遊びについて、幼児の年齢に適した内容や、遊びを通して育成したい力、活動時の注意点などについて班ごとに考察し、実践につなげています。最初は教員がプロンプトを準備していましたが、生成 AI を活用する機会が増えるにつれて、生徒たちは班員同士で話し合い、AI からより的確なアイデアを引き出すにはどのようなプロンプトがよいかを考えるようになりました。







「保育園実習のしおり」の挿絵は Gemini で作成しました。

以上のとおり、本校では生成 AI を単なる技術としてではなく、生徒の学びを深め、主体的な課題解決につなげるツールとして活用しています。

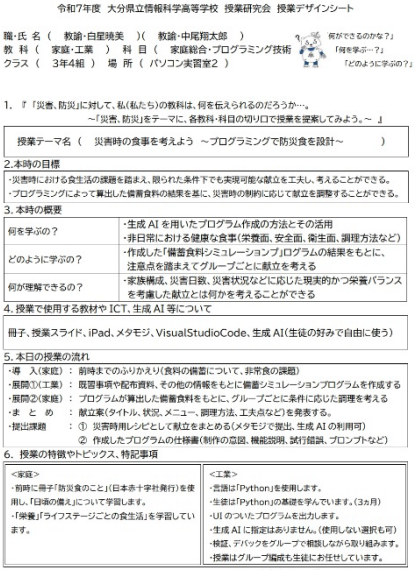
Ⅳ　研究授業

１　これまでの課題

本校では、研究授業を進める中でいくつかの課題がありました。輪番制による授業担当では、特に１学期に担当となった教員の負担が大きく、準備に追われる状況がありました。また、研究授業を実施する時期によっては、扱う単元が研究授業に適さない場合や、他教科の教員にとって理解しづらい内容になることもありました。さらに、これまでの研究授業の進め方が固定化し、改善の必要性も感じていました。

２　2024 年度の取組

そこで 2024 年度には、「生成 AI 公開授業」として、これまでの実施方法を大きく見直しました。まず、授業テーマを統一し、「生成 AI の活用」をテーマとして設定しました。また、輪番制をなくし、多くの教科・科目が参加できる形に変更しました。さらに、従来の指導案ではなく、教員の負担軽減を目的として「授業デザインシート」１枚を活用しました。



令和7年度　大分県立情報科学高等学校　授業研究会　授業デザインシート

職・氏 名（　教諭・白星暁美　）（　教諭・中尾翔太郎　）
教 科（　家庭・工業　）科 目（　家庭総合・プログラミング技術
クラス（　3年4組　）場 所（　パソコン実習室2　）

「何ができるのかな？」「何を学ぶ…？」「どのように学ぶの？」

1. 『「災害、防災」に対して、私（私たち）の教科は、何を伝えられるのだろうか…。
～「災害、防災」をテーマに、各教科・科目の切り口で授業を提案してみよう。～ 』

授業テーマ名（　災害時の食事を考えよう ～プログラミングで防災食を設計～　）

2.本時の目標
・災害時における食生活の課題を踏まえ、限られた条件下でも実現可能な献立を工夫し、考えることができる。
・プログラミングによって算出した備蓄食料の結果を基に、災害時の制約に応じて献立を調整することができる。

3. 本時の概要

何を学ぶの？	・生成 AI を用いたプログラム作成の方法とその活用 ・非日常における健康な食事（栄養面、安全面、衛生面、調理方法など）
どのように学ぶの？	・作成した「備蓄食料シミュレーションプ」ログラムの結果をもとに、注意点を踏まえてグループごとに献立を考える
何が理解できるの？	・家族構成、災害日数、災害状況などに応じた現実的かつ栄養バランスを考慮した献立とは何かを考えることができる

4. 授業で使用する教材や ICT、生成 AI 等について
冊子、授業スライド、iPad、メタモジ、VisualStudioCode、生成 AI（生徒の好みで自由に使う）

5. 本日の授業の流れ
・導　入（家庭）：前時までのふりかえり（食料の備蓄について、非常食の課題）
・展開①（工業）：既習事項や配布資料、その他の情報をもとに備蓄シミュレーションプログラムを作成する
・展開②（家庭）：プログラムが算出した備蓄食料をもとに、グループごとに条件に応じた調理を考える
・ま と め　：献立案（タイトル、状況、メニュー、調理方法、工夫点など）を発表する。
・提出課題　：① 災害時用レシピとして献立をまとめる（メタモジで提出、生成 AI の利用可）
② 作成したプログラムの仕様書（制作の意図、機能説明、試行錯誤、プロンプトなど）

6. 授業の特徴やトピックス、特記事項

<家庭>	<工業>
・前時に冊子「防災食のこと」（日本赤十字社発行）を使用し、「日頃の備え」について学習します。 ・「栄養」「ライフステージごとの食生活」を学習しています。	・言語は「Python」を使用します。 ・生徒は「Python」の基礎を学んでいます。（3ヵ月） ・UI のついたプログラムを出力します。 ・生成 AI に指定はありません。（使用しない選択も可） ・検証、デバックをグループで相談しながら取り組みます。 ・授業はグループ編成も生徒にお任せしています。

３　2025 年度の取組

2025 年度は、県立高等学校授業改善実施要領の趣旨を踏まえ、「各教科・科目の見方や考え方を横断的・総合的に働かせた探究的な学びの実現」を目標として取り組みました。そのため、授業者が十分な準備期間を確保できるよう研究授業の実施時期を 12 月に限定し、統一テーマを設定したうえで、各教科・科目それぞれの視点から授業提案を行うこととしました。また、教科内で複数教員による実施やチームティーチング、さらに教科横断型の授業も可能とし、柔軟な実施方法を取り入れました。

そこでテーマを、「災害・防災に対して、私たちの教科では何を伝えられるのだろうか。～『災害・防災』をテーマに、各教科・科目の切り口で授業を提案してみよう～」としてみました。

このテーマを設定した背景として、2024 年度より１年次の総合的な探究の時間で「防災」をテーマとして学習していること、また、昨年度の３年生の課題研究では、「防災」をテーマとして工業科と商業科が共同で研究しているグループもありました。

このような学習の積み重ねを生かしながら、「探究的な学び」をさらに発展させた授業改善活動として、各教科・科目の視点から「災害・防災」について学ぶ授業づくりを進めていきたいと考えました。

また、近年は、地震が頻発しており、懸念されている南海トラフ地震をはじめ、大雨や大型台風、大雪など、さまざまな自然災害が発生しています。私たちは日本に住む以上、常に災害と隣り合わせ

の環境にあります。そのため、防災について学ぶことは、自らの命や生活を守るために重要であり、一人ひとりが主体的に考える力を育成するうえでも非常に有意義であると考えます。

４　家庭科×情報科の教科横断型授業

（１）授業テーマの着想

まず今回の授業づくりは、「家庭科はさまざまな教科と連携できるのではないか」という発想からスタートしました。そこで、授業のアイデアを整理するために、ChatGPT を活用しながら検討を始めました。様々な案を考える中で、授業のテーマとして選んだのが「防災食」です。その背景には、2016年の熊本地震で経験した食料備蓄への不安がありました。実際、熊本地震の際には、大分市内のスーパーマーケットでも水や食料の在庫が不足し、店頭の商品棚が空になっている光景を目の当たりにしました。

その時、「この状態が数日間続いたらどうなるのだろう」「家族全員分の食料や水は足りるのだろうか」と、大きな不安を感じたことを今でも覚えています。特に、成長期の子どもがいる家庭では、単に食事の量だけではなく、栄養バランスまで考えなければなりません。

さらに、災害発生直後は物流が止まり、必要なものをすぐに買いに行けるとは限りません。避難所での生活となれば、限られた食料で数日間過ごす可能性もあります。そのような状況を考えると、「何を」「どのくらい」「どのように備えておけばよいのか」という点が大きな課題だと感じました。

その経験から、日頃から十分な備えをしておくことの重要性を改めて実感しました。こうした思いから「防災における食料備蓄の課題をどのように解決していけばよいか」を生徒とともに考える授業へと発展させました。

（２）教材の準備



授業づくりでは、ChatGPT を継続的に活用し、アイデアを整理しながら検討を進めました。いわゆる「壁打ち」のような形で活用し、授業の方向性を具体化していきました。

その後、「防災食のこと」という冊子を３年生全員分取り寄せ、その冊子を活用しながら授業展開を検討しました。

（３）情報科との連携

その後、情報科の教員との連携が始まりました。本校家庭科教員が情報科の教員と教科横断型の授業について何気ない話をしていた際、情報科の教員より「プログラミングを使って、必要な備蓄食料を算出できないだろうか」というアイデアが提案されました。2022 年度の学習指導要領改訂により、高校では「情報Ⅰ」においてプログラミングが必修となりました。本校では、「情報Ⅰ」を「情報産業と社会」で代替しており、情報科では工業科目の「プログラミング技術」を２年次と３年次に、それぞれ２単位ずつ履修しています。このことが家庭科の視点と情報科の学習内容を結び付けることができる、大きなきっかけになりました。

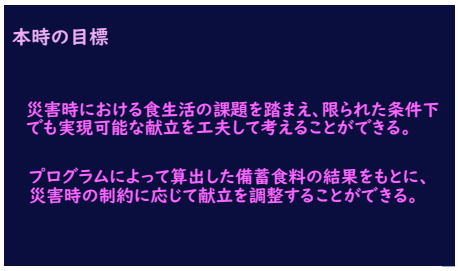
（４）授業内容の構成と教材・スライド作成

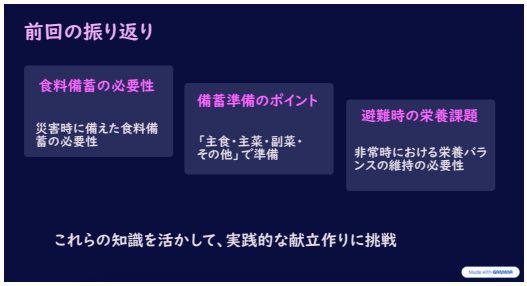
情報科では、プログラミングの学習内容を活用して必要な備蓄食料を計算する活動を取り入れました。また家庭科では、事前授業として「食料備蓄の必要性」「備蓄準備のポイント」「避難時の栄養面での課題」について学習を行いました。その際 ChatGPT を活用し授業構想を考え、また授業資料の作成では、Gamma などの生成 AI ツールを活用しました。授業展開案をもとにスライドを作成し、その後、文字サイズの調整や内容の加筆修正を行いながら教材を完成させました。

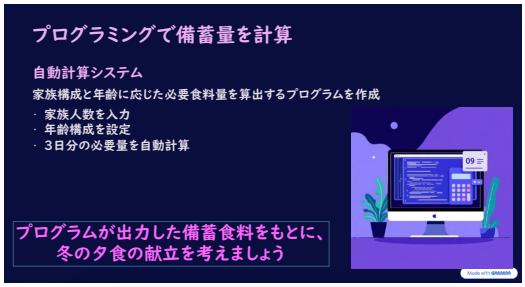
（５）研究授業の実施

研究授業当日は、県内外から90名の参加があり、文部科学省調査官２名にも参加していただきました。













授業の目的は、「知識を覚えること」ではなく、「限られた条件下で、どのように命と健康を守るか」を考える実践的な学びにありました。

情報科では、生徒がプログラミングを用いて「家族構成に応じた必要備蓄量」を算出するシステムを作成しました。

そして家庭科では、そのデータを基に、「災害状況カード」を活用しました。例えば、「レベル１：停電」「レベル３：断水」「レベル５：停電・断水・ガス停止」というように、状況ごとの制約を設定しました。生徒たちは、その条件下で夕食１食分の献立を考えます。ここで重要なのは、「正解を当てる」ことではありません。「水が使えない中で衛生をどう守るか」「高齢者や乳幼児への配慮をどうするか」「アレルギー対応をどうするか」「何を優先し、何を諦めるか」といった、多面的な視点で考えることに価値があります。生徒たちは、生成 AI も活用しながらペアで議論を深め、これまで家庭科で学習した栄養バランスや食品衛生、ライフステージ別の栄養の特徴などを、実生活と結び付けて考えることができました。



文部科学省の「DX ハイスクールの取組み」について、本校の実践報告が記載されました。

（６）振り返りと今後の課題

授業後には、生徒アンケートや事後検討会を通して振り返りを行い、今後の授業改善につなげました。実践後、37 名の生徒を対象にアンケートを実施しました。その結果、「教科を横断した学びのつながり」や「協働による考えの深まり」といった項目に対して、極めて高い肯定評価を得ることができました。では、生徒たちにどのような変化があったのか。従来（Before）と実践後（After）を比較し、「マインドセット」「スキル」「協働」の３つの観点から見ていきたいと思います。

１点目は「マインドセット」です。これまでは「ネット情報に頼る」という受動的な学習態度でしたが、実践後は「自分ごととして捉え、自ら問いを立てる」という当事者意識を持つように大きく変化しました。

２点目は「スキル」です。従来は「AI を単なる答え出し機として使う」傾向がありましたが、今回の学びを経て「AI をシステム構築のツールとして使いこなす」レベルへと成長しています。

３点目は「協働」についてです。以前は「分断された知識の暗記」にとどまりがちでしたが、実践を通して「他者の意見を尊重し、知識を統合・応用する力」を身につけることができました。

実際に、３年生のアンケートからは次のような感想が寄せられています。

「家庭科とプログラミングという別々の学びが関連していることを体感できた」「教科を横断して学ぶことで、学びがつながっている」「自分の考えが深まったり変わったりした」「情報を鵜呑みにせず自分で考える習慣がついた」など、生徒たちは単に知識を暗記するのではなく、異なる分野の知識を結びつけ、主体的にシステムを構築していく学習者へと確かな成長を遂げています。

このように、生成 AI を活用しながら教科の枠を越えた連携を行うことで、生徒がより実践的で探究的な学びに取り組める授業づくりを進めています。

事後検討会では、本授業は２教科の知識を単に組み合わせただけではなく、それぞれの学びを深め合う「掛け算」の学習になっていたと高く評価されました。参観された先生方からは、生徒たちが終始生き生きと楽しそうに学習していたことや、特に新しいミッションに取り組む際に目を輝かせていた姿がとても印象的だったという感想が多く寄せられました。また、生徒たちは家庭科で学んだ食物アレルギーや脂肪酸などの知識を献立作成に活用していました。さらに、備蓄食料のシミュレーション活動を通して、災害レベル５のような深刻な状況下では備蓄が重要であることを、具体的に実感していた様子がうかがえたとの評価もいただきました。

今後の課題として、家庭科は「命」「生活」「人との関わり」を扱う教科であることから、多くの教科と連携した横断型授業を実施できる可能性が高いと考えます。例えば、「防災」をテーマとした場合には、以下のようにさまざまな教科と関連付けた学習活動に取り組むことができます。

このような教科横断型の学びを通して、生徒は多面的・多角的な視点から課題を捉え、実社会に生かせる実践的な資質・能力を育むことが期待できます。今後は、生成 AI も効果的に活用しながら、他教科との連携をさらに深め、生徒の主体的な学びにつながる授業づくりを進めていきたいと考えています。

	家庭科 × 保健体育	家庭科 × 英語	家庭科 × 地理歴史・公民
	「災害時の健康管理」	「外国人支援と防災」	「地域防災と共助」
授業例	避難所生活の健康課題 エコノミークラス症候群 ストレスケア	避難所英会話 やさしい日本語 多文化共生防災	地域の災害リスク調査 高齢者・乳幼児・外国人の 避難課題を考える 避難所運営ゲーム（HUG）
活動例	避難所運動プログラム作成 栄養不足シミュレーション 心のケア方法を考える	英語版避難所掲示作成 アレルギー表示 外国人向け非常食説明	地域ハザードマップ分析 能登半島地震の事例研究 避難所の食生活課題を考察 災害時のジェンダー問題

Ⅴ　おわりに

今回の授業実践を通して、家庭科における生成 AI の活用は、生徒の課題発見力や課題解決力の育成につながる可能性があることがうかがえました。また、教員にとっても、生成 AI は授業改善や教材開発を支援する有効な手段として活用できることが確認されました。さらに、教科横断的な学びとデジタル技術の活用を組み合わせることにより、「生きる力」を育む家庭科教育の可能性を一層広げることができると考えます。

私たちは今、AI 技術の進展や社会構造の変化、価値観の多様化など、大きな時代の転換点に立っています。このような時代において、教育に求められるものは、知識を伝達することだけではなく、生徒が自ら問いを立て、考え、未来を切り開く力を育成することであると考えます。

今後も、生成 AI をはじめとするデジタル技術を効果的に活用しながら、新たな教育実践に挑戦し続け、生徒一人一人が自らの可能性を信じ、新たな価値を社会に創造できる人材へと成長できるよう、実践と研究を積み重ねていきたいと考えます。

第136回　研究協議会（秋季）香川大会
研究協議資料

令和８年10月15日　発行

全 国 高 等 学 校 長 協 会 家 庭 部 会

〒102-0071
東京都千代田区富士見１丁目５―６
電　話　０３―３２６１―０６１７
ＦＡＸ　０３―３２８８―１６７０
E-mail：all-kocho@katei-ed.or.jp